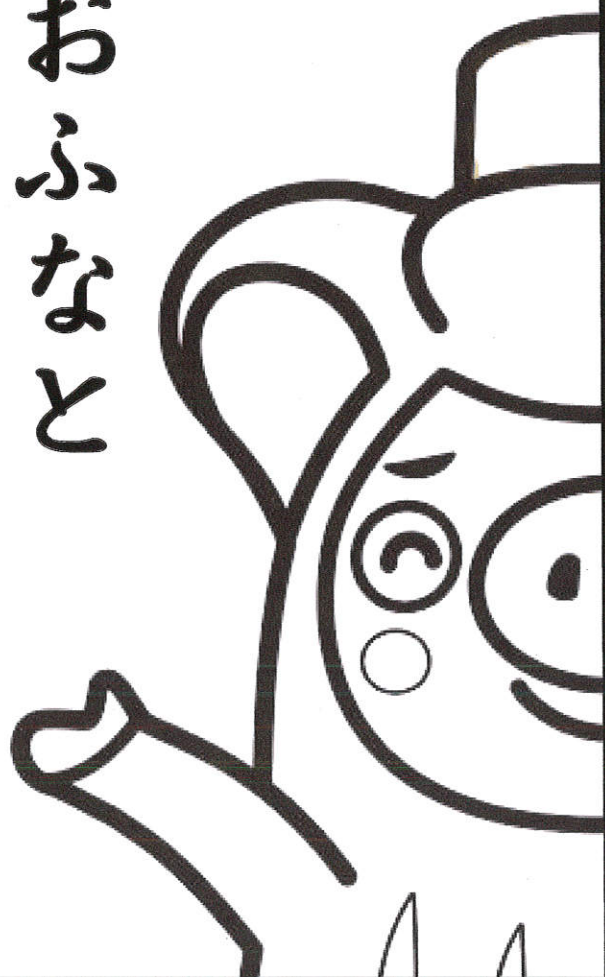
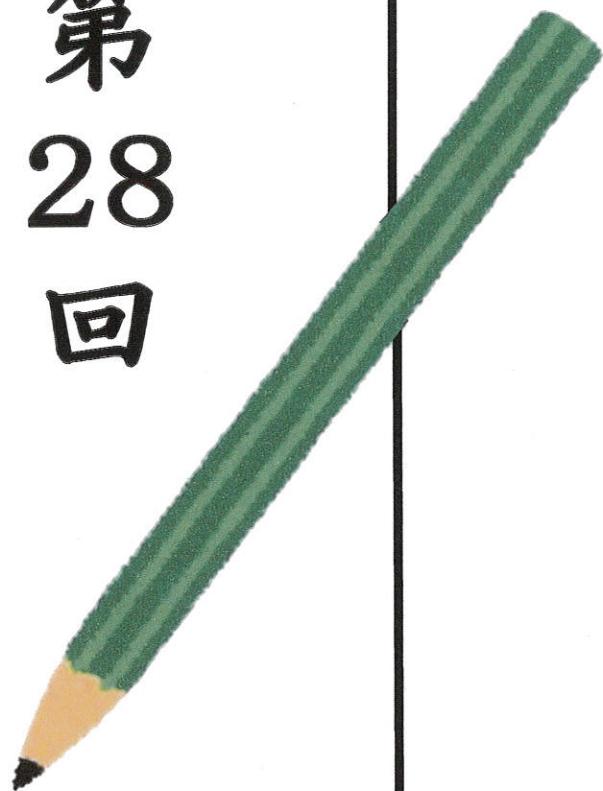
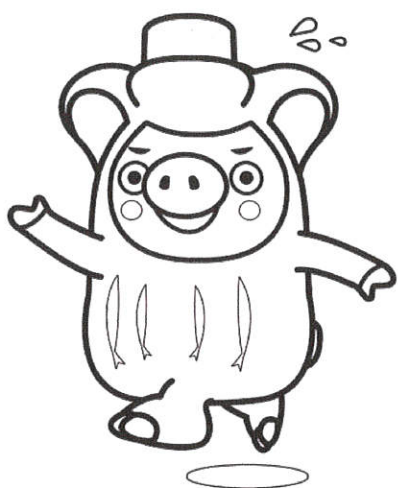


第 28 回

ふるさと・おおふなと

お話大賞作品集



大船渡市立中央公民館

はじめに

今年で二十八回目を迎える「ふるさと・おおふなとお話大賞」は、小中学生・一般の方から十五点の作品が寄せられました。今回も「童話創作で、ふるさととおふなとの未来に光を」をテーマに、ユーモア溢れる作品や心温まる作品、示唆に富んだ作品が沢山寄せられ、このような素晴らしい作品集を発刊できたことを嬉しく思います。

ふるさとの自然を感じ、想像したことや考えたことを言葉にし、お話を作り上げることは簡単なことではありませんが、同時にとても楽しいことです。自分で想像した物語を作り上げることで、豊かな人間性や想像力を、楽しみながら伸ばしてほしいと思います。

この作品集を手にした皆様が、それぞれの作品に込められた作者の想いを受け取り、郷土の将来に思索を深めていただければ幸いです。

結びに、この作品集の発刊にあたり、ご指導とご協力をいただきました小・中学校をはじめとする関係者の皆様、そして審査委員の皆様には厚く御礼を申し上げます。

大船渡市教育委員会

教育長 小松 伸 也

講 評

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員長

石 山 宣 昭

二十八回目を迎える本大賞に、今年は十五作品が応募されたとお聞きし、一抹の寂しさは拭いきれませんが、ほっと安堵しております。本大賞は平成二年に二十八作品の応募から始まったとお聞きしているからです。年々応募作品の少なくなっていくことは、寂しいものです。

縦系には故郷を舞台にし、横系には作者が考えたストーリーによって紡がれた今年の応募作品も、読み応えのある作品ばかりだったと思います。

始めに、今年度の応募作品の特徴を紹介します。

◇小学生低学年部門

- ・ 作品の舞台が、身近な生活空間だったり、宇宙であつたりと想像力に富んでいること
- ・ 物語を対話形式で書いていること
- ・ 作品から書き手の心の優しさが伝わってくること

◇小学生高学年部門

- ・ 作品の舞台が学校や家庭、地域などに設定されており、自身の経験が作品構成に投影していること
- ・ 擬態語・擬声語や会話文が多用され、文章全体がリズムカルであること
- ・ 主人公やその他の登場人物がそれぞれの持ち味を発揮し、物語の展開に変化をもたらしていること

◇中学生部門

- ・ 「海」「ツバキ」など身近にある故郷の良さを取り上げていること
- ・ 中学生が関心を持っている話題や出来事など社会事象が物語に反映されていること
- ・ 起承転結と言った構成や、会話文を多用するなど場面構成や記述に工夫がみられること

次に審査について説明します。審査員四名は、一編一編丁寧に目を通し、応募された皆さんの表現しようとした意図を、読み取ろうとしてきました。審査の際には、以下の四つの観点で審査しています。

- ①テーマが独創的で発想が豊かであるか。
- ②時・場所・人物といった構成に工夫がみられるか。
- ③読み手に分かりやすく、しかも場面の様子が目に浮かぶように書かれているか。
- ④故郷に目を向け、故郷に対する愛情が強く感じられる作品であるか。

今回応募された皆さんの作品は「故郷」にかかわる身近な題材を取り上げていました。さらに現実と不思議な世界を交叉させるなど、場面構成にも工夫がみられました。それぞれの皆さんの豊かな想像力が輝きを放つ作品ばかりでした。

数回に渡る審査の結果、次の四作品が入賞作品になりました。入賞された四人の皆さん、本当におめでとうございます。

☆大賞

「わすれない思い出」

◇越喜来小学校六年 畑野 寧音さん

震災により亡くなった一人のおばあちゃん。そのおばあちゃんが八年後、中学生になって主人公のもとに現れるという話です。話の中心である「のぶ子」さんの正体は、最後に明らかになるという展開になっています。物語の所々に「しゃべり方」や「私のおばあちゃん」といった伏線が配置され、「もしかしたならのぶ子さんは……」と読み手を引き込む作品に仕上がっています。ツバキ・サンマなど大船渡の魅力も存分に描かれています。そればかりではなく、災害・非難訓練などにも触れ、風化しつつある「大震災」を正面から意識したメッセージ性を備えた作品にもなっています。物語の山場も確りしており、人物の気持ちの変化も丁寧に描かれています。また登場人物の役割もはっきりしています。現実性を生み出すために、物語の構成に工夫の見える作品に仕上がっています。

☆特別賞

「しゅうじの大ぼうけん」

◇吉浜小学校二年 白木澤 秀治君

主人公が月に行き、月のウサギと交流するというフアンタジーな物語です。しかも吉浜のアワビをお礼に置いてくるという展開になっています。短い文で簡潔に描かれているので、次の展開が楽しみです。また浜の生活、特にお父さんの漁業に取り組む様子が、大変詳しく描かれています。作者のお父さんに寄せる尊敬の思いが、ひしひしと伝わってきます。話は家族が中心になって展開しますが、発端、事件、結末という場面構成が確りしているので、分かりやすくなっています。月のクレーターとアワビという取り合わせも見事だと思います。おそらく日頃から身近な物事を細やかに観察する作者の姿勢が反映しているのでしょう。読み終わった後には、心が温かくなる微笑ましい作品に仕上がっています。

「特別賞」受賞となったのは、作者の取材力と観察力、そして何と言つても物語に挑戦しようという創作意欲に審査員から賛辞が寄せられたからです。

☆奨励賞・中学生部門

「大船渡の守護神」

◇日頃市中学校一年 新沼 愛梨さん

主人公が五葉山への登山の最中に異類（椿の守護神）に出くわすという物語です。大船渡のツバキを前面に押し出した作品でもあります。「あれ？おかしい」という書き出しで始まり、読者を作品の世界に引き寄せる構成になっています。三人の登場人物も生き生きと描かれています。それぞれの人物になりきり、行動や気持ちを想像しながら描いたからでしょう。また会話文が効果的に使われ、作品に心地よいリズムとテンポを生み出しています。異類との遭遇というフィクションの世界が舞台ですが、一人称の視点から描かれているせいか、全く違和感が感じられません。適度に伏線も配置されており、物語の楽しさを感じさせます。結末からは作者の前向きな思いが伝わってくるようで、爽やかささえ感じさせる作品になりました。

☆奨励賞・一般部門

「プレゼント大作戦」

◇木川田 恵理子さん

孫の視点になってひいおばあちゃんへの思いを綴った作品です。ひいおばあちゃんの誕生日にまつわる話ですが、作品の背景には海やカモメなど、吉浜海岸の美しさも描かれており、その光景が浮かび上がってくるような気がします。また随所に擬態語が用いられており、場面に臨場感や緊張感を生み出しています。さらに、登場人物の気持ちは決してストレートに描かれていませんが、主人公の感情の起伏は、ひいおばあちゃんの何気ない動作や行動によって、確実に読み取れます。動作の裏に隠された思いが、自然に浮き彫りになってくるからでしょう。人物の気持ちの変化した出来事が、丁寧に描かれているからだと思います。孫とひいおばあちゃんとの心の交流が、ほのぼのとした温もりを醸し出す作品に仕上がっています。

今年、十一月に吉浜地区に伝わるスネカが、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。

これは民間伝承と呼ばれるもので、地域の方々が何代にも渡って、地域に伝わる大切な財産としてスネカを受け継いできたからだと思います。昔から日本の各地では神様が姿や形を変えて、家庭を訪れると信じられてきました。しかし、年月が過ぎるにつれ、多くの土地では、伝承し続けることが難しくなったわけです。

先ほども触れましたが、当コンクールは平成二年、旧三陸町で始まりました。当時の関係者の皆さんの思いを想像してみますと、三陸町の自然や行事や生活など、生活の中から三陸町の素晴らしさや良さを見つけ出し、三陸町という故郷に誇りを持ち続けてほしいと願っていたのではないのでしょうか。それから二十八年の間、大勢の皆様が毎年、作品を創作し続けてきたわけです。「継承」することの意義は、スネカであろうと、当コンクールであろうと、全く変わりのないものだと思います。なぜなら「継承」するのは、不特定の人々に委ねられているからです。

昨今は文字による表現活動は、携帯端末など情報機器が中心になり、手書きによる作文は、次第に敬遠されが

ちになってきているようです。文字による表現活動は、今まさに冬の時代だと言えるのかも知れません。

しかし、文字による表現活動は、人間が生み出した掛け替えのない方法であり、手段であることに代わりありません。考えたことを文字として書き表すという方法は、人間の持っている素晴らしい能力の一つだと思います。作文という活動を通して、「故郷」を見直し、「故郷」の復興を考える、そんなきっかけとなる作品と、今後も出会いたいものです。



目次

発刊の言葉

大船渡市教育委員会教育長

小松伸也

講評

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員長

石山宣昭

○大賞

わすれない思い出

越喜来小学校 六年 畑野寧音……1

○特別賞

しゅうじの大ぼうけん

吉浜小学校 二年 白木澤秀治……5

○奨励賞

【中学生部門】

大船渡の守護神

日頃市中学校 一年 新沼愛梨……6

【一般部門】

プレゼント大作戦

木川田恵理子……10





☆ 作品集 ☆

《小学生低学年部門》

はづきちゃんとうちゅう人

吉浜小学校 二年 大森葉月…… 14

《小学生高学年部門》

私が夢を持つまでの話

越喜来小学校 五年 葛西姫依…… 16

森のおくで

越喜来小学校 六年 田中愛子…… 20

大船渡へ家出

越喜来小学校 六年 村上優…… 22

犯人を探せ!!

越喜来小学校 六年 川夢萌…… 25

《中学生部門》

かぎは大船渡にあり

大船渡中学校 一年 野田葵生…… 28

大船渡がめぐんだ奇跡

綾里中学校 一年 熊澤舞…… 32

プレゼント

第一中学校 三年 千田麻夏…… 36

《一般部門》

坂田 百次郎

菊地崇浩…… 39

初恋はカモメが見ている？

村上真紀子…… 46

大船渡の海

阿部優子…… 49





大賞

わすれない思い出

越喜来小学校六年 畑野 寧音

ある日突然、とても大きな地震と津波が起こった。それは、何人もの人が亡くなる、とても大きな震災になった。

その震災が起きた次の日、ある家のひいおばあさんが亡くなっていたのが見つかった。亡くなっていたおばあさんは、この大船渡でたった一人の百十歳ごえのおばあさんだった。昔のことを一番よく知っている人――そんな人の死は、とても大きなことだった。

震災でおばあさんが亡くなってから八年後、実は、おばあさんには、「希」という一人のひ孫がいて、希は、来年から中学一年生になる。いつも「ポプラ公園」で仲間と遊んでいた。

その仲間が成助、永ちゃん、芽衣だ。夏休みが始まり、お盆がやってきた。

「遊びに行ってきます。」

「こらっ、お盆なんだから、一日くらい家にいなさい。」お母さんのさけぶ声が聞こえたが、その声を背にして、希は走って公園に行った。公園に着くと、見知らぬ女の人が友達の三人と遊んでいた。中学生くらいの人のようだった。

三人から話を聞くと、その女の人は、「のぶ子さん」と言って、今日引越してきたばかりなのだそうだ。のぶ子さんは、白いＴシャツに茶色いスカートをはいて、かみの毛はおさげに結んでいた。

のぶ子さんにこの町に引越してきた理由をたずねた。「私ね、まだ小さい時に、大船渡に住んでいたことがあるのよ。だから、大船渡の良いところをいっぱい知っているの。でも、あなたたちのような最近の子は、『都会に行きたい』だとか『大船渡は田舎すぎてイヤ』だとか言ってるでしょ。だから、最近の子たちにちよいと大船渡の良いところを教えてあげたいと思ってね。」

「のぶ子さん、言っていることはとても同感できるけど、おばあちゃんみたいなしやべり方だね。」

「あらやだ、つい昔のクセが・・・。」
希達は笑った。のぶ子は、はずかしそうに顔を真っ赤にした。

「・・・で、どんなことを教えてくれるの。」

「今日は、大船渡の花について話しましょう。大船渡の花と言えば、椿だよ。椿は冬もかれない花。そして、椿まつりっていうまつりもあるのよ。椿まつりでは世界中の椿が集まるの。赤色だけじゃなくて、色々な色の椿が集まるのよ。まあ、椿まつりは年に一度、椿が咲く時期にしかやらないけどね。」

「それじゃあ、今度連れて行ってもらおう。」

永ちゃんが楽しそうに言った。

「さて、今日の大船渡のお話はここまで。あとは皆で遊びましょう。」

「やったあ！今日はサッカーしようぜ。」

五人は日が暮れるまで遊んだ。

次の日の午後、希はすぐに遊びに行った。公園には、まだ、成助とのぶ子さんしか来ていなかった。しばらくして、芽衣と永ちゃんが来ると、息をきらしながら言った。

「ごめん。お昼ご飯がさんまだったから、食べるのに時間がかっちゃって。」

「ぼくも、うにだったから、つつい食べ過ぎちゃって、おそくなっちゃった。ごめん。」

それを聞いた成助はうらやましように、

「すごいおいしいご飯じゃん。いいな、おれも食べたかったな。」

と言った。成助は、見た目は引きしまっているが、とてもグルメなのである。

「あらあら、もう今日話すことがばれちゃったみたいね。」その言葉を聞いた成助は、

「えっ、今日の話は食べ物なの。やったあ。おれ、食べ物大好き。」

とうれしそうに言った。

「それじゃあ話すね。大船渡といえば海の幸よね。大船渡の海の幸といえば、何かしら。」

「さんまに鮑、そしてホタテにウニわかめ。」

成助が一息でさげんだ。

「さすが成助。食べ物のことなら、何でもわかるのね。そう、成助の言った通り、たくさんの海の幸があるわね。そこが大船渡の良いところ。大船渡の海には、たくさんの海の幸があるの。だから、たくさん、ウニやさんまが食べられるのよ。」

「おお、それはすごいところだな。」

成助が目まをきらきらさせて言った。

「さあ、今日はここまで。」

「よし、今日はかくれんぼしよう。」

希達は、昨日より遅くまで遊んだ。次の日はどんな話をするのかわくわくしていた。

そして次の日、希はまた公園へ行った。公園には、のぶ子さんしか来ていなかった。のぶさんは、いつもより真剣な表情で、希は少しびっくりした。そして、

「今日は、真剣な話をしようと思うの。」

と言った。五分钟后くらいには、三人が来た。

「全員そろったわね。それじゃ始めるわ。」

希たちは息をのんだ。

「あなた達、東日本大震災覚えてるかしら。」

「ああもちろんさ。忘れるわけないだろう。」

「そうよ。あんな大きな震災。忘れる方がおかしいわよ。」

「地震、津波、火事・・・全ておこったよね。」

「そうそう。それでうちのひいばあちゃんも死んじゃったし。」

「そうよね。でもあなた達、他にどんな苦労があったか覚えてないでしょう。」

「そう言われれば確かに・・・。」

希達は言葉がでなくなった。

「だから今日はその苦労を教えてあげるね。ほとんどの人は、あの震災は絶対に来ないと思ってたでしょ。だから『大丈夫』『津波は来ない』って思ってたにげなかった人もいた。それでたくさんの人が亡くなった。」

私・・・私のおばあちゃんもその一人だった。そして津波のえいきょうで、その後は家が流されて住む場所がなくなって、停電した家もたくさんあったねえ。水も出なくなつて大変だったよ。ひどいところは一か月ぐらい電気もつかなかったよ。」

「私の家なんて、十日ぐらいお風呂に入れなかったわ。」

「ぼくの家もだよ。」

のぶ子は続けた。

「そんないざという時のために避難訓練という活動がある。だから学校の避難訓練は、必ず真剣にやらなければならぬ。そして、私・・・私のおばあちゃんみたいに、津波をあれどつてはいけないよ。これからそんな災害なんか命をうばわれないように、訓練には真剣に取り組むようにしないとね。」

のぶ子はそう言った後、うで時計を見て、

「あら、もうこんな時間。帰らないと。今日はお盆が最後の日だから、早めに帰らないと。じゃあ、またね。」

と言つて急いで帰ってしまった。

「じゃあぼくも、ひいばあちゃんに会つてこようかな。」

「じゃあ今日はもう退散するか。」

そう言つて四人もすぐに帰った。

次の日、ポプラ公園でいつも通りに遊んでいたが、

のぶ子さんは来なかった。そして、その次の日ものぶ子さんには会えなかった。さすがに心配になった希達は、探しに行こうとしたけれど、住んでいる場所がわからないため、どこを探していいのかわからず、見つけることができなかった。仕方なく、四人は希の家へ行った。

「どこに行っただろう。のぶ子さん・・・。」

「そうねえ、でも住んでいる場所がわからないから探しようがないわ。」

落ちこむ四人を見ていた希の母親が、一冊のアルバムを持ってきて言った。

「ねえ、昔のアルバム見つけたの。みんなで見たら。元気になるかもよ。」

四人はアルバムのページをめくった。そして、そこにあった写真を見て、目を丸くした。

「えっ、これいつの写真よ。」

「一九一四年・・・。」

「ど、どういうこと？」

すると母親が手紙を持ってきた。

「希。これ『のぶ子さん』ってお友達じゃないの。」

ポストに手紙が入ってたわよ。」

「えっ、のぶ子さんから手紙？」

希は母親から手紙をもらい、ふうとうから手紙を出し、読み始めた。

「希、成助、永ちゃん、芽衣へ

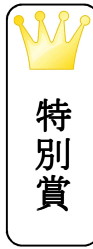
突然でおどろくと思うけど、私は現代の者ではありません。あの東日本大震災で命を落とした者です。私のおばあちゃんと言っていた人は、私、希のひいおばあさん、のぶ子です。私は、あなた達に、私のように命を落としてほしくないから、現代へお盆の日だけやって来ました。私の教えたことを、どうか忘れないでください。ずっとずっと忘れないでいてください。そして、一緒に話した大船渡の良いところも忘れないでください。大船渡のいいところをたくさんの人に教えてあげてくださいね。最後に、成助、永ちゃん、芽衣、希のことをよろしくお願いします。

のぶ子より」

「ひいおばあちゃんだったんだ。」

希は小さくつぶやいた。おどろきにふるえながら手紙をだきしめる。他の三人も、おどろきながらアルバムの「ひいおばあちゃん」を見つめた。

それから日が暮れるまで、四人はひいおばあちゃんが教えてくれたことを一つ一つ思い出しながら話をした。お盆にあった不思議な出来事を、これからもずっと絶対忘れないと心にきざみながら。



しゅうじの大ぼうけん



吉浜小学校二年 白木澤 秀治

名前はしゅうじ。とても元気でやさしい男の子です。しゅうじのお父さんは、すぐくはたらきもので、ウニやアワビをとり朝早く出かけます。大きなごに二つもとるので、すぐくたいへんです。すぐくしんけんな顔でがんばっています。お父さんは、ウニをとったら船をかたづけて、わたとりをします。しゅうじも、土曜日と日曜日は、わたとりのお手伝いをしますが、とてもたいへんです。

「やっぱりたいへんだなあ。お父さんは、いつもこれをやってて、すごいなあ。」

がんばった日の夜は、とったアワビをおいしく食べます。「やっぱおいしいな。さいこうだな。」

ある日の朝、しゅうじは、テレビでうちゅうのぼんぐみを見ていました。そして、「うちゅうひこうしは、かっこいいな。ぼくも行きたいな。」と思いました。それで、お母さんに、

「うちゅうに行つていい。」

と聞きました。お母さんは、

「一人で行くの。じゃあ、すぐに帰ってきてね。」

と言いました。

そして、うちゅう目ざして、うちゅう船で旅立ちました。

うちゅうへつきました。そこは、くらくて太陽がまっ赤に光っています。しゅうじは、びっくりです。そして、しゅうじは、行きたかった月にぶじにたどりつきました。うちゅう船から出てみると、うさぎがいっぱいいいました。

「ここはどこ。月。」

「そうだよ。ようこそ。うさぎ月へ。」

とうさぎは言いました。

「きみ、うさぎなの。」

「そうだよ。ぼくは、うさぎだよ。月のうさぎ。まん月のとき月を見ればいるよ。」

と、うさぎは答えました。しゅうじは、

「いっしょにじゃんけんであそぼうよ。」

とさそいました。

「うん、わかった。じゃんけんであそぼう。」

「きみ、じゃんけんのやり方、知ってるの。」

「知ってるよ。早くいっしょにあそぼうよ。」

じゃんけんでいっぱいあそんだしゅうじは、帰る時間になりました。あそんでくれたおれいに、吉浜のしんせんなアワビをあげました。

「これ、お父さんががんばってとったアワビだよ。おいしいよ。」

それで、うさぎはおかえしに、うさぎたちがついたおだんごをわたしました。

「また、あそびに来てね。」

「ありがとう。じゃあね。」

吉浜に帰ると、もう夜になっていました。

「ただいま。」

「おそかったわね。」

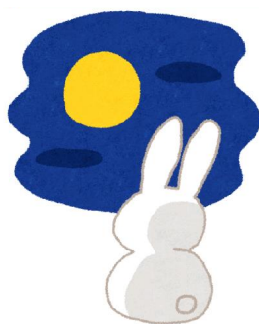
しゅうじは、お母さんにうさぎのことを話しました。今日の月は、まん月でした。二人は月を見上げました。

ぼうえんきょうで、よく見たら、うさぎはもちではなく、アワビをもっていました。

「おいしいかな。」



【中学生部門】



大船渡の守護神

日頃市中学校一年 新沼 愛梨

あれ？おかしい。俺達空飛んでる。というか正確には浮かんてる？いや落ちているんだ。中一の夏休みだよ。もっと遊ぼうよ。もっと楽しもうよ。というかなんでこんなことになったんだっけ？

俺は、椿海人^{つばきみひと}。船渡中学校の一年生だ。みんな俺のことカイトって呼んでくれるんだ。じいちゃんめ！カイトの方が絶対いい！

一年生のみんなは船渡小学校からいっしょの仲間だ。しかし、一年生の中に転校してきたやつが一人いる。松下コウスケ。クールで運動も勉強も学年一でアニメのドラ○もんにてでくるできす○君みたいなやつだ。俺とは性格が真逆で話は合わないと思ういつも話しかけてみたいとひそかに思っている。

とある日、話しかけるきっかけを探しているとコウスケが持っていた本のブックカバーがとれるのが見えた。題名は「世界の椿」だった。それを見て俺はガッツポーズをした。俺はちっちゃいころから椿が大好きだった。あの真っ赤な花卉、青々とした緑の葉、見ているだけで心がいやされる。しかも俺の名字もつ・ば・き！大船渡市民としてほこりをもっていた。これならいける。

「ねえ、松下君。」

「え、なに」

コウスケは静かに言った。

「松下君って、椿好きなの？」

「うんそうだけど、それがなにか？」

「俺もさあ椿大好きなんだよね。色といい形といい全て。」俺の言葉を聞いた瞬間コウスケの目が輝きを放った気がした。

「本当！？俺も全てを愛している！気が合うな。えーと

名前は・・・」

「ああ。ごめんごめん。名前言ってなかったね。俺の名前は、椿海人。みんなカイトって呼ぶから松下君もカイトって呼んでくれ。」

「分かったカイト。俺のことも松下じゃなくコウスケでいいよ。」

「うんOK！」

これがコウスケとの出会いだ。俺達はすぐうちとけ合って親友になった。

そして、俺達は、運動会や期末テストを乗り切って、夏休みに入った。俺はテストで赤点ギリギリで補習確定。そして部活で遊ぶ時間なし！しかし土日や祝日は部活はないという決まりになっていた。そこで俺は誘ってみた。

「なあコウスケ。八月十一日の祝日に家族で日頃市の五葉山登ろうと思ってるんだ。いっしょにいかないか？」

「えっいいのか？」

「うん。母さんがコウスケも誘ってみればって。」

「ヤッター！俺も母さんに聞いてみるよ。一度は登ってみたかったんだ。日頃市って植えられてる椿の本数大船渡市で第五位だぞ知ってるか？日頃市中学校でも毎年植えてるらしいからもっと増えてるかも。」

とてもうれしそうだった。こんなコウスケ見たことない。本当に好きなんだな椿。

八月十一日、ついに五葉山に登る日が来た。俺達は興奮が抑えきれなかった。俺は何回か登ったことはあったが久しぶりだったので、頂上に行くまで本当に疲れた。でも、達成感があった。たぶんコウスケも同じこと思っているんだろう。とても良い笑顔だったし。

下山している途中にとってもきれいな椿があった。行く時はなかったような気がするけど、まあ見ていなかったのだろう。椿の後ろは崖だったが、もっと良く見たくて、コウスケといっしょに近づいていった。本当にきれいだった。でも、すぐに異変に気がついた。

「なあカイト。椿って冬に咲く花じゃなかったっけ。」

「俺もそれ思った。なんでいま咲いてるんだ。」

そんな疑問を抱きながら、俺達は椿にふれてみた。そしたらいきなりその椿は枯れていった。花が枯れていくのと同時に俺達が立っていた地面もくずれていった。どうしよう。俺達空飛んでる。正確には浮かんでる。いや落ちてるんだ。

「どうしよう、コウスケ。」

「俺にも分からん！」

「ぎゃー!!」

二人で同時に目をつぶって叫んだ。叫びまくった。メキ、メキメキメキとそんな音を確かに俺は聞いた。気がつくと、そこには白い空間が広がっていた。そしてとなりにコウスケが倒れていた。

「おいコウスケ。起きろ。おい！」

「んーなんだ。カイトなんだここは。」

「俺にも分かんねえ。」

二人で辺りを見わたすと、椿があった。とても大きくて立派な椿だ。六メートルくらいあるんじゃないか？二人で近づいてみた。

「大きなあ」

「立派だ。」

二人で見とれていると、どこからか声がした。すごく低い声で重い。

「おいその若者。」

「いや、名前があるって。」

「敬語を使わんか！わしはおまえらの命を救ってやったのじゃぞ。」

「どういうことだ・・・あつですか。」

「おまえらは、椿を触って、崖から落ちただろう。」

「はい。」

「そこをわしが救ったんじゃない。」

「そうだったんですね。ありがとうございます。あの一つ質問してもよろしいですか？あなたは誰ですか？」

コウスケはいつでも冷静だなあ。

「わしの名は百花^{ひゃっか}。おまえらの前にいる椿^{つばき}じゃ。そしてこのわしこそこの大船渡市の守護神じゃ。」

「あつ！もしかして、あのメキメキって音、おまえかあー！」

「敬語を使えと言つとるじゃろ。カイト」

「すんません。」

「あの百花さん俺達をもとの世界にもどしてくれませんか。」

コウスケが言った。俺も「そうだそうだ」って言った途端、頭上から椿の実がたくさん降ってきた。そして「久しぶりなんじゃ。子供と話すのは。わしの話を聞いていけ。」

という百花の答えが返ってきた。俺達は自分達で帰れる自信がなく百花の話を聞くことにした。

「昔はな、わしの周りで子供達が笑顔で毎日遊んでいたんだ。椿の実を拾ったり、鬼ごっこをしていたり、だるまさんがころんだもしていたなあ。まあ六百年ほど前じゃがのう。わしは子供が大好きなんじゃ。」

「へえーこんな頑固なじいさんが子供好きだとは思わ

なかったなあ。」

「おい失礼だぞ。」

と百花とコウスケの両方に怒られた。

「まあ話を続けよう。遊んでいた子供達は時代が変わっていくごとにどんどん減っていった。一本^{ひとこ}になつてしまつて二百年はたっているかのう。」

「そうなのか。さっきはすみませんでした。」

「もうよい。」

「あの、もう一つ質問してもいいですか？なぜ俺達を助けてくれたんですか？子供が好きだと言つても、二百年も一本^{ひとこ}でいたんですよね。」

「確かに。なんで？」

「それはなあ。・・・やっぱり子供が好きだからじゃな。」

「そうなんだ。」

「あと、見捨てることができなかつたんじゃ。わしはな、この大船渡市の守護神といつてもなつたのはつい最近なんじゃ。」

「えつ、そうなんですか。」

「ああ。おまえ達だと・・・保育園のあたりか。七年前の東日本大震災を覚えておるか？」

「うん。覚えてるよ。」

「あれはひどい災害だった。ましてや俺らは園児で

すごくパニック状態になっていたよ。」

「わしは、その大震災でこわれていった大船渡を見て、この大船渡を守りたい。あいつのために。と強く思った結果守護神になっていたんじゃない。」

「そうだったんだ。あのさ、百花、あいつって誰だ？」

「カイト、知らんのか？それではこれで思い出すだろ。やつのおぐせじゃ。」

『俺達は地面の上に立っている。でも時に地面は互いにぶつかり合って自分にも上に立っている人にもヒビを入れる。しかしそのヒビからでた芽の花は思ったよりキレイなんだ』

百花の言ってくれた言葉は、とてもなつかしかった。でも誰なんだろう。

「まあ、いいか。二人ともわしの話を聞いてくれてありがとう。それではもとの世界にもどすぞ。あつカイト、やつの名は——だ。礼を言っといてくれ。」

目の前が一気に暗くなっていった。

気がつくと、二人はもといた場所にいた。時間は変わらな^うい。そして椿^{つばき}も見あたらない。

「カイト。椿山脈^{つばきさんみやく}って誰なんだ？」

「俺の死んだじいちゃんだ。じいちゃん、百花と知り

合いだったのか。」

俺は一人で笑った。そしていいことを思いついた。

「なあコウスケ。夏休みの自由研究、椿^{つばき}についてやらないか？」

「それナイスアイデア！」

次は二人で笑い合った。

俺はこれから何度も挫折するかもしれない。でも大丈夫。気の合う大親友と二人の守護神がついているから。



奨励賞

【一般部門】

プレゼント大作戦



木川田 恵理子

ぼくのひいばあちゃん。

たいてい寝ていて、ぼくが話しかけても、目をうつすら開き、うんうんとうなずくだけで、また目を閉じ

てしまう。ぼくの声、聞こえていないような気がする。

ぼくが生まれる前は、畑で野菜を作ったり、田んぼでお米を作ったり、それよりもっと前は学校の先生だったんだって。本当かな。

ぼくはひいばあちゃんがたくさんおしゃべりしたり、笑ったりするのを見たことがない。もうすぐひいばあちゃんの誕生日。何と百歳になるんだ。

ぼく、ひいばあちゃんを喜ばせたいな・・・。

そうだ、プレゼントをあげよう。誕生日にぼくはお父さんから大好きな昆虫の図鑑をもらった。ひいばあちゃんは何が好きなのかな。

お母さんに聞いてみよう。

「ひいばあちゃんが好きなもの？うーん、アイスが好きね。」

学校で友達のまこちゃんにも聞いてみた。

「お花とか、バースデーカードはどう？」

うーん、何か違うんだ。

日曜日、テレビを見ていてひらめいた。貝がいい！テレビでは女の人が砂浜できれいな貝を見つけてとっても喜んでいる。ひいばあちゃんも、きれいな貝をもったら喜んでくれるかもしれない！

その日は雨が降っていたので、次の日学校の帰りに

海へ出かけた。でも、良い貝はあまり見つけれなかった。

ちよっと前に、学校の行事で吉浜海岸のごみ拾いをしたから、砂浜はきれいだった。毎年海開きの前にはごみ拾いをする。ぼくは海が好きだから、ごみ拾いもいやじゃない。いつまでも吉浜の海がきれいだといいな。

カモメの集団は、ぼくが近づくといつせいに飛んでいき、ぼくが離れるとまた戻ってきた。貝の他にもいいものが見つければそれも拾った。何度も何度も海に行って、ぼくはプレゼントを集めた。うん、準備ばんだ。ぼくは箱を抱えて、にやにやしてしまった。

ひいばあちゃんの誕生日。

朝からお祝いのお客さんが来たり、カメラマンが写真を撮りに来たりと、家の中が慌ただしい。ぼくは百歳になると賞状がもらえるなんて知らなかった。長生きのお祝いの賞状なんだ、と、「市長さん」が教えてくれた。でもひいばあちゃんはあまりうれしくなさそうだ。お客さんが帰ると、いつもの場所でのっさり横になってしまった。

いつプレゼントを渡そうかと迷っているうちにお昼になった。お祝いのごはんは、ちらしずし。もくもくとひいばあちゃんは背中を丸くして食べている。そし

て食べ終わると、さっさとまた茶の間で寝てしまった。
誕生日だけど、いつもと同じに。

ぼくは、ひいばあちゃんがお昼寝から起きたらプレゼントを渡すことにした。

カチ、カチ、カチ・・・

まだ起きないかな。

すう、すう、すう・・・

気持ちよさそうに寝ているけど・・・。

カチ、カチ、カチ。

もう夕方になっちゃうよ！

待ちきれなくなったぼくは、ひいばあちゃんの肩を揺すった。

「ひいばあちゃん、見て！ぼく、ひいばあちゃんに誕生日プレゼントがあるんだよ！」

宝箱からピンク色の貝を出して見せると、ぼんやりとながめている。

「もっとあるんだよ、ほら！」

今度はとっておき、からからになった星型のヒトデをひいばあちゃんの目の前に差し出した。

「わあ！やった!!」

ひいばあちゃんは、聞いたことがないほどの大きな声をあげ、ばしっとヒトデを振り払った！

ぼくはびっくりして、飛んでいったヒトデを拾いに行った。

どうしよう。喜ばせようと思ったのに、怒らせてしまったかもしれない・・・。

「どうしたの？」

そこへお母さんがやってきた。

「またそんなの拾ってきて。」

「だって貝をプレゼントしたかったんだ。」

「それは貝じゃないでしょう。」

「これもいいかなって思ったんだもん。」

「あら、こっちはきれいな。ひいばあちゃん、プレゼントですってよ。プ・レ・ゼ・ン・ト。」

お母さんが、ひいばあちゃんを起こして座らせ、耳元で話しかけた。ひいばあちゃんはしわしわの手でほたて貝をさわっている。

「さあ、おやつですよ。」

お母さんがテーブルの上にアイスを並べると、ひいばあちゃんは貝をテーブルに置き、アイスのカップを手を取った。

「どうしたの。ハルキも座って。」

あーあ。何だかがっかりな気持ち。

ぼくはひいばあちゃんの方を見ないようにして、

アイスを食べ始めた。ヒトデにあんなに驚くなんて。貝だけにしておけば良かったのかな。失敗したなあ……。そう考えていたら、腕に冷たいものがさわった。

「わっ！」

ひいばあちゃんが、アイスのカップをぼくの腕に押しつけていた。

「ひいばあちゃんどうしたの。食べないの？」

ハルキにあげるの？」

ぼくには、小さくうなずいたように見えた。

「本当にいいの？」

ひいばあちゃんが、うなずいた。テーブルの上にカップを置き、ぼくの方に押し出してから、うつむいてスプーンを両手でもんでいる。その様子は、なんて言ったらいいか……。

がまんしているような、残念そうな……。

そうだ！ぼくはひいばあちゃんのそばに行って、肩にさわった。

「ありがとう。でもひいばあちゃんも一緒に食べようよ。」手にアイスを渡したら、ひいばあちゃんはびっくりしたようにぼくの顔を見た。ぼくは大きな声で言った。

「ひいばあちゃん、お誕生日おめでとう。
ずっと元気で長生きしてね。」

またうなずいたひいばあちゃん、ちよつと笑っていたよ。
ぼくの誕生日プレゼント作戦は成功だ！



作品集

《小学生低学年部門》

はづきちゃんとうちゅう人

吉浜小学校二年 大森 葉月

名前は、はづきちゃん。元気でやさしい女の子。
ある日の夜、はづきちゃんは、空を見上げて言いました。
「星、きれいだな。」

すると、うごくものが見えました。それは、なんとうちゅう人でした。うちゅう人は、どんどん近づいてきて言いました。

「しくしく。友だちがほしいよ。」

わたしは、友だちになってあげることになりました。うちゅう人は、

「ありがとう。」

と言いました。うちゅう人がのってきたのりものにつけて、なかよくあそびました。びゅんびゅんとんで、いい気持ちです。「わたしもやってみたいなあ。」と思ってやってみましたが、ぜんぜんまっすぐすみません。

でも、はづきちゃんはあきらめませんでした。すると、できたのです。

「やった。やったあ。」

うちゅう人は、

「よかったね。すごいね。」

と、ほめてくれました。

「ありがとう。」

はづきちゃんは、うれしくてうれしくてたまりません。

「大船渡をあんないしてあげる。」

と言いました。

まず、二人は夏虫山に行き、トンネルすべりだいやボルダリングであそびました。石をのぼってつぺんまでつきました。おりるとき、こわかったけどうちゅう人は

「がんばれ。」

と言ってくれました。とってもうれしかったので、おりることができました。すべりだいは、にょろにょろしてとても楽しいです。

つぎは、ロープツリーをのぼりました。とても高くてけしきがとってもきれいです。うちゅう人も、

「本当にきれいなね。」

と見ていました。ツリーは、ぼよんぼよんとゆれました。うちゅう人とはづきちゃんは、いっぱいあそんであせ

がいったいになりました。そこで二人はコーラをのみました。うちゅう人は、コーラをのんだのははじめてです。

「しゅわしゅわして、すごくおいしいね。」

とうれしそうに言いました。

「帰るとき、お母さんにプレゼントしよう。」

「うん。お母さん、きつとよろこぶね。」

つぎにはづきちゃんは、コンビニをあんないしました。

「いろいろな食べものがあるんだね。」

「そうだよ。地球には、いっぱい食べものがあるんだよ。」

うちゅう人は、

「食べてみたいな。」

と言いました。

「じゃあ、うちにおいでよ。」

はづきちゃんは、自分の家にしようたいしました。

そして、カレーを作ってあげました。おばあちゃんが

そだてた野さいをたっぷり入れて作りました。うちゅう

人は、ぱくつと食べた後、

「おいしいね。」

とほめてくれました。はづきちゃんは、うれしくなりました。うちゅう人は、おかわりをしていっぱい食べました。

夜になったので、ぼうえんきょうで空を見ました。きれいな星がたくさん見えましました。

「あそこがぼくのすんでいるところだよ。」

と教えてくれました。

「きれいだね。わたしもあそこにすみたいなあ。」

「ぼくのすんでいるところもすてきだけど、きみのすんでいる吉浜もすてきじゃないか。だって、海もきれいだし魚がいっぱいいるし、食べものもおいしいでしょ。」

「ありがとう。そんなに吉浜のことをいっぱい知ってくれたんだね。わたしも星のことをいっぱい知りたいな。わたしたち、すごくすくなくなかのいい友だちになったね。」

その後、二人は花火大会を見に行きました。

「海に花火がうつって、まるで海にも花火が上がっているみたいでしょ。」

うちゅう人は、

「きれいだね。」

とうれしそうに言いました。はづきちゃんも、

「きれいだね。」

と言いました。二人は、同じ気持ちになりました。

うちゅう人が帰る時間になりました。

「お母さんにおこられるから、もう帰るね。友だちに

なってくれたおれいにこの七色のまほうの石をあげるよ。これをつかえば、いつでも会えるよ。だから、かなしくないよ。」

うちゅう人は、はづきちゃんを家までおくってくれました。

「ばいばい。また、来るね。」

はづきちゃんは、

「わたしのこと、わすれないでね。」

と言いました。うちゅう人は、

「ぜったいにはづきちゃんのこと、わすれないよ。」

と言ってくれました。

はづきちゃんは、少しだけなみだが出ました。

《小学生高学年部門》

私が夢を持つまでの話

越喜来小学校五年 葛西 姫依

ザアーザアー バサー

ぼくが生きていた時の最後の音。その音はたえることなく、いつまでも流れていました。

ですが、ある日その音はピタリとやみ、目を開けるとぼくはゆうれいになっていました。最初は動くこともままならなかったぼくですが、七年後の今は近くの家やスーパー、小学校にも行けるようになりました。そんなぼくの日課は、越喜来小学校の五年生を見に行くことです。ちなみに、なんで五年生かというと、ぼくも今年五年生だからです。あつ、もうすぐ学校が始まるぞ・・・！

キンコーンカーンコーン

「これから朝の会を始めます。きりつ。」

ガタガタガタギギー

「おはようございます!!」

「宿題係からで今日の一人勉強を忘れてきたのは、ゆうきくんとまおくんと——。」

「明日持つて来ます!。」

ああ、またあの二人だ。ゆうきくんとまおくんは、よく忘れ物をするな。今日、水曜日だけど今週は全部忘れてるや。大丈夫かな・・・。

「先生は、明日と明後日は出張です。学級は先生がいない時に本当の姿を見せるといいます。高学年としての姿を見せられるように頑張ってください。日直、どうぞ。」

「これで朝の会を終わります。」

先生、ハードルが高すぎだよ。本当に大丈夫かな。

〈一時間目 国語〉

「先生ー、ノート忘れましたー。」

〈二時間目 算数〉

「あずさ、ちよつとのりかして！」

〈三時間目 理科〉

「先生ー、ガラスわっちゃいましたー。」

〈四時間目 英語〉

「ワン、トゥー、スリー、フォー、ファイブ、スイツ

クス・・・。」

「シックスだつてー。」

〈五時間目 音楽〉

「十五分まで練習だ。はじめ！」

「ピーピッピッピッピッ（高）」

〈六時間目 図工〉

「ポスターを描いてください。」

「はーい！」

数十分後

「なあ、こう。最近でたゴケモンクエスト買った？めっちゃ面白いよ！」

こんな日が毎日続いてるって先生は大変だな。かといっ

て声をかけられるわけじゃないし・・・。助けてあげたいな。

その日の帰り、女の子達が話していました。

「つかれた。なんで忘れ物できるのかね。」

「だよねー。先生の注意は意味くない？」

「それなー！」

そんな話を聞き不思議に思う子がいた。

なんでだろう。なんで私はあの人達と同じ女子なのに考え方がちがうんだろう。いっしょに直していくことはいやなのかな。

「ねえー。あーずさ！」

ああ、ゆきちゃんだ。私、苦手なのに。

「何。」

「今週の土日、空いてる？」

「日曜日なら。」

「マジで!?じゃあ私んちで午後遊ぼうよ！」

「う、うん。行けるようだったら電話するね。」

「りようかいりようかい!じゃ、また明日！」

強引な感じ、好きじゃない。もうちよつとソフト

に・・・。って!

「えっ!？」

あれ?なんか宙に幼稚園年中さんぐらいの男の子が!

てか透けて見える……。いやいやいや、私、つかれてるんだよきつと。

(チラッ)

やっぱり見える……。なんだあれは……。

一方、そのうれしいは……

ぼくをじつと見ているあの子は？話しかけてみようか。

「こんにちは。」

「へっ!!しゃべった!!」

びつくりされてるけど聞こえてる……。この子なんなんだ!!

「あなただれ？」

「ゆうれい！年は十歳です。」

「名前は？」

「名前……。覚えてない……。」

「そっか。どうしよう……。」

「とりあえず、太郎でいいよ。あなたは？」

「あ、あずさです。」

あずさ？どこかで聞いたような……。まあいいや。

「よろしく。」

「よろしくです。」

「えー!?今、私、ゆうれいと会話してる!?めっちゃありえない……。！ていうか十歳なの？このルックスは？変だ！早く帰ろう……。」

その夜、この事をお母さんにいいました。

「お母さん！聞いて！さっきゆうれいを見ちゃった！

どうしよう……。」

「そんなのただの見間違いよ。ほら、早くお風呂入って寝なさい。」

「はい……。 (そんなわけないはず。)」

私は見たし、会話もした。でも、ゆうれいなんているのかな。私、つかれてるかも……。

次の日

「おはようございます!!」

「宿題係からで、今日の宿題を忘れてきた人はいませんでした。」

えっ!!ウソだ。忘れてないわけない。今日はまぐれだよ。きつと。

次の日

「宿題を忘れてきた人はいませんでした。」

えー！なにがあったんだ……。でも授業態度も良くなっているということは、先生いないと良くなる説が浮上してきた……。いやでも土日をはさむから月曜日はさすがに……。あ、そういえば、ゆきちちゃんと日曜日遊ぶんだった。新しくできたポプラの公園に集合って言ってたな。何するんだろ。

日曜日のポプラ公園。

「あつ、来た来た！おそいよあずさ！」

「ごめん！宿題やってて…。つて、なんでゆきちゃんポプラの木の上にいるの！？行っちゃだめでしょ！」

「別にいいんだよ！ほら、あずさもこっち来て！」

「で、でも…。。」

「早く早く！」

私、運動苦手で木登りとかできないのに…。。

ミシッ ミシッ ギギギ

大丈夫かな。よしあとちよつと…。。あつ！

「うわっ！」

やばい、落ちてるやばい！だれか助けて…。。

フワッ

ん？あれ？なんか宙に浮いてる！？なんで！？

「あずさちゃん、大丈夫？」

「あつ、あなたは…。そうだ、太郎だ！」

「覚えててくれてありがとう。うれしい！」

「あの…。えっと…。まずおろしてくれない？」

「あつ、うん。」

ぼく、気づいてしまった。あずさちゃんはぼくの唯一の友達だった。幼稚園の頃からいじめられてた。このぼくのしゃべり方。ぼくっていうのが多いから、

ぼくというたびにたたかれた。上ぐつがなかったりも

した。周りも無視してる。そんな時、一番接してくれ

てた子があずさちゃんだ。なぐさめてくれたり、いじ

めてた子に注意してくれたり、よりそってくれた。

ぼくの四歳の誕生日の日もいっしょに祝ってくれた。

でもその日、すごい大きなゆれがあつて、「つなみが

来ます。」とか言っていた。家がくずれそうでにげた

けど、あずさちゃんがくれた仮面ライダーのストラッ

プほしくてもどっちゃったんだ。そしたら海にもまれ

て…。。気づいたらこうなっていた。

「あずさちゃん。」

「何？」

「ぼく、ゆうただよ。ゆうくんってよんでくれたでしょ？」

「ゆうたつてえつ、あのゆうた？」

「そう！」

「ゆうくんだったの？」

「うん。」

「ゆうくんに会ったあの日から、学級がすごく良くなっ

てて、宿題もつてきてたあは。」

「ぼくが忘れてる子の所に行つてやってあげた。」

「ゆうくんの仕業だったのね…。。」

「ぼく、あのストラップずっと持ってるよ。」

ぼくは、それを見せた。

「ああ、これ誕生日にあげたやつ・・・。」

「ぼく、今日からストラップになる！」

「何言ってるのって、あれ？」

「あーずさー！大丈夫ー？」

「う、うん！大丈夫！」

ゆうくんがいなくてストラップだけがある。仮面ラ

イダーの顔が少し、笑ったような気がした。

「おはよー！あずさ！あれ、なにそのストラップ。」

「ゆきちゃん、これは・・・。お守りってところかな。」

「そっか、ところでさ！——。」

「私には夢がある。保育士になることだ。」

これが私が夢を持つまでの話。

森のおくで

越喜来小学校六年 田中 愛子

今日は、七月一日、とても温かいので、愛華ちゃんは、太陽をたくさんあびて緑色にかがやいている葉桜の木の下で絵をかくことにしました。愛華ちゃんは、絵をかくのが得意で、コンクールで賞をとるほどの才能を持っていました。その日から、五日後に夏虫山公園で親子行事が行われました。内容は、

「かくれんぼ。」

でした。愛華ちゃんは、まだ三年生。愛華ちゃんは、かくれんぼも好きでした。愛華ちゃんは、おにからかくれるためにどこに行くかまよってしまいました。ふと、草原を見ると、少し穴があいていました。そこに入っていくと、まるで、小さな動物専用のトンネルのような道がありました。ずんずん歩いていくと、三百六十度見ても変わらない緑の空間が広がっていました。そこにいたのは、森のようせいでした。森のようせいは、

「あなたがくるところではありませんよ。」

と言いました。愛華ちゃんは言いました。

「ごめんなさい。今かくれんぼをしていたの。」

と答えました。すると、森のようせいは、

「じゃあ、この森を案内してあげる。」

そう言われて、ついていきました。そのときです。

愛華ちゃんは、石につまづきけがをしてしまいました。すると、森のようせいは、

「心配しないで、なおしてあげる。」

そういって、愛華ちゃんが、ひざを出すと、小さなつむじ風をおこして緑の光がぱっと光り、すぐに消え、けがもなおっていました。

「ありがとうございます。」

愛華ちゃんは、お礼を言いました。森のようせいは、とても悲しい顔でした。ようせいといっても、ジャスマンのようなプリンセス。うでは、金色のすずをつけていました。

「シヤラ、シヤラ。」

「とてもいい音ね。」

愛華ちゃんは、話しかけました。愛華ちゃんは、森のようせいが悲しそうな姿を見て、たずねました。

「どうして、悲しい顔をしているの。」

「ああ、じつは昔、私は、母がなくなつたから森の女王をつとめているの、でもあまりうまくいかなくてなやんでいるの、どうすれば。」

森のようせいは、泣きたくなりました。愛華ちゃんは、

「大じよう夫、勇気をもつてつとめれば、きっとすべてうまくいくよ。」

愛華ちゃんは、森のようせいをはげましてあげました。森のようせいは、

「うん、がんばってみよう、愛華ちゃんのいうとおり、

勇気を出してがんばってみよう。」

「ちよつと、まって、どうして私の名前を知ってるの。」

「それは、あとで分かるよ。」

そういって、森の中をずっと、進んでいきました。道の途中で、リスや子ぐまを見かけました。愛華ちゃんは、森はきれいだなと思いました。夕方になりました。

「じゃあ、私そろそろ帰るね。」

「まって、やつと愛華ちゃんと会えたのに、はなれるなんていやだよ、いけないで。」

「どうして。」

「私のこと、分かるでしょ。」

そう言うと、金色の皮がはがれ、女の子が現れました。その子は、二年前に急死してしまった愛利ちゃんでした。

「愛利ちゃんが、森のようせいなの。」

不思議にたずねました。

「うん、やっと気づいてくれた。やっぱり私の親友だね。」

「また、あしたもくるね。」

「あしたはないよ。」

「どうして。」

「今日が私の命日、天国の神様に一年だけ、森の中にいてもいいという許可をもらって今日が最後だったの。でも愛華ちゃんとまた会えてうれしかった。さようなら。」

そういつて、天国へのぼっていきました。金色の羽を愛利ちゃんは、落としていきました。それをひろった愛華ちゃんは、お家へ持って帰り、大切に部屋にかざりました。そして、この不思議な出来事を二学期の作文にしました。そして、見事に賞をとりました。家には、愛利ちゃんをとった一枚の写真がかざられています。あれ、愛利ちゃんがちよつと笑ったかな、気のせい。

大船渡へ家出

越喜来小学校六年 村上 優

「お母さんなんか、大きらいだ。」

ぼくは、そう思いながらバスに乗っていた。今は夏休み。ぼくはお母さんとけんかして、仙台から家出してきた。たぶん今ごろ、お母さんは、

「どこ行つたのー。陽介ー。」

と探しているだろう。でもぼくは絶対に帰らない。行き先も知らずに乗ったバスが止まった。外の空気を吸いたかったから、そこでおいた。そしてぼくは、あてもなくひたすら前に歩いた。しばらく歩いていたら、つかれたので、近くの公園で休むことにした。

まわりを見てみた。もう昼になっているみたいだ。それより、ここはいったい・・・？

近くに年が自分より少し上の人がいたので、話しかけてみることにした。

「あ、あのー。すみません。」

その人はこちらを見たが、すぐにどこかに行ってしまった。

「この町の人はつめたいな。」

ぼくはそうつぶやいた。

少し休けいしていたら、また町の人がいたので、話かけてみることにした。

「あのー。すみません。仙台から来たんですけど・・・。ここってどこですか。」

その人はぼくと同じくらいの年だった。さっきの人とは違って優しく教えてくれた。

「ここは大船渡だよ。ぼくは、この町に住んでいる良太。」
さっきの人とはちがつて明るく答えてくれたので、ぼくも自己紹介をすることにした。

「ぼくは陽介。お母さんとけんかして家出てきたんだ。」
ぼくがそう言ったら、良太はおどろいた。

「えっ本当に。帰らなくて大丈夫。」

良太はぼくを心配してくれた。

「大丈夫だよ。」

ぼくはそう答えた。すると良太が話しかけてきた。

「今日、ぼくの家泊まる。」

「えっいいの。ありがとう。」

そして陽介は良太の家に向かった。

良太の家に着いた。そこには、四人の人がいた。

その中にぼくを無視したあの人がいた。その人は、ぼくを見ると、少しびっくりしたような顔をした。良太は、自分の家族を紹介してくれた。

「こっちはお父さん。こっちはお母さん。こっちは妹。そして・・・。」

良太はあの人を指差してこういった。

「こっちはお兄ちゃん。」

ぼくはびっくりした。兄弟なのに、全然性格がちがうと思ったからだ。

その後、良太の家族にあいさつをし、内容を説明してから、良太といっしょに外で遊んだ。そのとき良太のお兄ちゃんの話をした。

「良太のお兄ちゃんって、良太と全然性格がちがうね。」
と言った。すると良太は、

「そうかな。何かあった。」

と不思議そうな顔できいてきた。ぼくは昼にあったことを話した。

「ぼくが家出てきて、公園で休んでいたら、良太のお兄ちゃんを見つけたんだ。ぼくが話しかけたら、こっちを見て、すぐにどこかに行っちゃったんだ。」

すると、良太は、

「ごめん。」

とあやまってくれた。良太は本当に優しい。

「お兄ちゃんにも直接言っておくから。」
と良太は言った。

その後、良太の家にもどり、良太の家族と夕ご飯を食べ、良太といっしょにねた。

次の日、朝ご飯を食べた後、良太のお兄ちゃんに話しかけられた。

「昨日は、ごめん。」

そう言われて、ぼくは許してあげた。

その後、ぼくは、良太と良太のお兄ちゃん、良太の妹といっしょにボール遊びやおにごっこなどをした。少し休けいしているとき、良太のお兄ちゃんに話しかけられた。

「帰らなくていいの。陽介くんの家族、心配しているんじゃない。」

ぼくは少し気持ちが変わった。

「やっぱり帰ったほうがいいのかな。」

「うん。帰ったほうがいいと思うよ。」

「分かった。帰る。明日の朝までに帰る準備をするよ。」

ぼくがそう言くと、良太のお兄ちゃんは、少し安心した顔になった。

その後、みんなでつりをした。陽介はつりが初めてだ。良太達に教えてもらいながら、つりをした。いつのまにか陽介は、つりに夢中になっていた。何時間か経って、空を見たら、もう夕方になっていた。魚を見てみた。

クーラーボックスの中は、魚でいっぱいだった。

良太の家にもどった。夕ご飯は、さつきつってきた魚だった。サンマというらしい。サンマは、とってもおいしかった。

夜、ねる準備をしていたら、良太のお兄ちゃんが話しかけてきた。

「今日はありがとう。とっても楽しかったね。」

「うん。すごく楽しかったよ。」

とぼくは言った。良太のお兄ちゃんは、本当は優しいんだなと思った。良太のお兄ちゃんが、

「昨日は本当にごめんね。少し考え事をしていて、あんまり話しかけてほしくなかったんだ。」

と言った。ぼくは、納得した。ぼくもそういうときがあるからだ。ぼくは、

「大丈夫。気にしないでね。」

と言った。ぼくと良太のお兄ちゃんのきよりがぐんと縮まった気がして、ぼくはともうれしかった。

夜は、良太達とみんなでいっしょにねた。

次の日、ぼくは朝ご飯を食べた後、自分の家に帰ることにした。良太の家族に事情を説明し、お礼を言った。良太のお父さんとお母さんに、
「またいつでも来ていいよ。」

と言われた。ぼくは、

「はい。」

と元気よく返事をした。ぼくは、良太と良太のお兄ちゃんに声をかけた。

「また遊びに来るね。ありがとう。」

と言った。みんな笑顔で見送ってくれた。

ぼくは、バスに乗り、仙台に向かった。帰ったらお母さんに何を言われるんだろうと考えていた。

家に着いた。お母さんはとても心配していた。

「どこにいったの？」

「家出して、大船渡に行ってた。」

そしてぼくは、大船渡であったことを全部話した。

そして、

「また大船渡に遊びに行きたい。」

とぼくが言うと、お母さんは、

「いいよ。それとも大船渡に住む。」

と言った。ぼくは、とつてもうれしかった。

その後、ぼく達は、引越し、大船渡に住み、仲良く暮らした。

犯人を探せ!!

越喜来小学校六年 及川 夢萌

私のお父さんは、ホヤやワカメをとる腕利きの漁師です。これは、お父さんが働く鬼沢漁港で起きた事件のお話です。

その日の朝、浜から帰ってきたお父さんが、がっかりした様子で言いました。

「ワカメの仕事を始めようとしてテントの中に入ったらさ、昨日買ったジュースが箱ごとなくなってたのさ。」

それと、学さんのテントでは、ガソリントankが盗まれてたつたどさ。」

私は、びっくりしました。今までそんなことは聞いたことがなかったからです。私は『犯人を探したい、見つけたい、いつも仕事をがんばっているお父さんの助けになりたい』と強く思いました。

次の日の朝二時、私はパッと目を覚ますと、布団からとび起きました。電灯を持ち、急いで犯人を探しに出かけました。

三十分ほど探し続けましたが、人の姿は見つからず、ただ動物の声が聞こえているだけでした。

不意に、森の方からガサガサと何かが近づいてくる音がしました。ドキドキして身構えながら目をこらすと、鹿のフリッキーでした。

私は、フリッキーに相談しました。

「ねえ、フリッキー。お父さんの大事な物が盗まれてしまったの。一緒に探してくれないかな。」
すると、フリッキーが

「いいよ。それなら、僕の仲間も呼んでくるね。」
と言って、森の中へ跳びはねて行きました。

少し待っていると、フリッキーが動物達を連れてきました。たぬきのポン助と、きつねのコン吉、くまのくまてつ、あらいぐまのあら助、ヘビのヘビ太、ハクビシンのハク助、リスのリス吉です。

「みんな、ありがとう。」

そして、この集まった仲間と私で、犯人を探しに行きました。分担を決めて漁港のすみずみまで探しました。

それでも、この日は見つかりませんでした。私は、一度様子を見て、明日また探すことにしました。

次の日の朝、浜へ行くと、お父さんはもう来ていました。お父さんに

「今日も何か盗まれたの。」
と聞くと、

「ガソリントankが、ガソリンが入ったまま盗まれたよ。」
と、朝からがっかりとした顔になっていました。私は『絶対犯人を見つけてやる』と心に決めました。

その日の夜、また、私は犯人を探しに出かけました。

私は、大事な仲間がいたことを忘れていました。それは、たこのシャッキーです。シャッキーにも、たくさん仲間がいます。カメ吉、イカのショッピー、イルカのチャキ、クラゲのチョッピー、ラッコのラックです。シャッキーは、この仲間達を連れてきてくれました。そして、森の仲間と海の仲間、そして私とで、犯人を探しに行きました。

こんなに大勢で探しても、犯人は見つかりませんでした。結局見つからないまま、一週間が過ぎてしまいました。

私は考えました。そして、

「となり町の小石浜や綾里、越喜来へ探しに行こう。」
と決めました。

すぐに、仲間を集めて、どこに行くかを相談して、探しに行きました。

小石浜にいますとお母さんから電話がかかってきました。

「ガソリントankが見つかったよ。」

私はお母さんに、タンクにさわらないように言って、

一度、みんなを鬼沢漁港に集めました。そして、見つかったガソリントankを、指もんをつけないように持って、みんなで警察署に届けました。鑑定の結果は後で聞くことにして、再び犯人を探しに出かけました。

何日も何日も探しましたが、犯人の手がかりは見つかりませんでした。もう、私も動物達も、みんななくたかったです。元気になるまで、探すのを止めて休けいをとることにしました。『もう、ここにはいないのかな。』と考えていたその時、鬼沢漁港を同じ車がふらふらと行ったり来たりしているのが見えました。みんなは、『車に乗っている人があやしいぞ。こっそり見に行こう。』と言い合って、その人がどこへ行くのか、後を追ってみました。でも、この人はすぐ帰ってしまいました。何日かたち、今度は別のあやしい車が、またふらふらと行ったり来たりしていました。ちよつとかくれて見に行くと、前に来た人とはちがう人でした。だが、ずつと何時間もいました。

車がテントのそばに停まりました。降りてきた人は、辺りを見回すと、学さんのテントの中に入っていきました。私は、近づいて中をのぞきこみました。その人が何かを盗もうとしているのを見て、警察に通報しました。

こうして、犯人が一人見つかり、学さんのガソリン

タンクも無事に学さんの元へ返ってきました。でも、私のお父さんの物を盗んだ犯人は、まだ見つかりません。みんなは、

「くやしい。」

「絶対見つけてやる。」

と言い合いました。

何日かたちました。警察署からお父さんに、釜石で犯人がつかまったと連絡がありました。私は、『まさか、あんな遠い所にいたなんて』と思いました。うれしくて、仲間を呼んで、みんなに伝えました。

警察署の話では、バッテリーを盗んだ犯人を取り調べていると、鬼沢漁港でガソリントankとジュースを盗んだことも認めたということでした。

二日後に、その犯人の言ったとおり、綾里の白浜でお父さんのガソリントankが見つかりました。お父さんのテントからタンクとジュースを盗んだのは、この犯人だと分かりました。

「被害届を出しても、この犯人はお金がないから、補償もできません。その代わり、もう同じ犯罪をしないように今回のことをよく聞いて、二度とこのような事件が起きないようにします。」

と、警察が話してくれました。その犯人は、これから

刑務所に五年以上も入るといっても教えてくれました。

何日かたち、もう一人の女の人も捕まったと連絡がありました。その人が、先に捕まった犯人達に指示を出して、盗みをさせていたそうです。

この話を聞いて、悪いことをすれば、それが自分に返ってくるということが分かりました。みんなにも話すと、

「見つかって良かったね。」

「これで一安心できたんじゃない。」

「がんばって探してくれてありがとう。」

と、みんながやさしく言ってくれました。お父さんも笑顔になりました。

またこんな事件が起こらないよう、かん視カメラをつけるなどの工夫をしていきたいと思いました。ずっとこの町、甫嶺、越喜来、そして大船渡が、明るく笑顔でいられる町にしていきたいと思いました。再び、甫嶺や鬼沢漁港に、みんなの素敵な笑顔が生まれました。

《中学生部門》

かぎは大船渡にあり

大船渡中学校一年 野田 葵生

「転校生の、菅原由希です。」

事件は、私が東京から転校した日に起きた。

私は父の仕事の都合で大船渡に引っ越してきた。急な転校だったから、私がその日、何が起こるか全く予想できていなかった。

「じゃあ、由希さんは、椿さんの隣の席に座って下さい。」

私は言われた通り席に着いた。すると、隣の席の女の子が話しかけてきた。

「こんにちは。私、浅井椿。よろしくね。後で、あなたのことも教えてね。」

椿っていうのか……。良い人そうだな。仲良くなれたらいいなと思った。

「よろしくね。椿。」

「こちらこそ、よろしく。由希。」

授業が終わり、昼休みになったときだった。

「ねえ、由希。私、学校を案内するね。ついてきて。」
「うん。いいよ。」

「あ、ちょっと待って。知花と麗子を呼んでくる。」

そう言うのと椿は教室に戻り、二人を呼んだ。すぐに戻ってきた。二人の女の子が椿と一緒にやって来た。

「紹介するね。私の友達の石田麗子と、武田知花。知花は、学年二位のしつかり者で、麗子は、天然でかわいいんだよね。」

「あ。私は由希と言います。よろしく。」

と言うと、知花と麗子は用事があると言って歩いていった。

「なんだ……。どうせなら知花も麗子も一緒に案内しようかなと思ってたのに。」

「椿……。行こ。」

私は椿に校内を案内してもらった。椿が言うには、この校舎は古く、至る所がぼろぼろで、前なんか雨漏りがあり、すべて転んだらしい。

「それでさ、雨降ると湿気もすごい。気をつけて。」

そう言われたときだった。向こうの階段の辺りから悲鳴が聞こえてきた。

「由希、走って。」

行くと、女の子が踊り場で腕を痛そうに押さえていた。よく見ると、さつき椿が紹介した女の子……。知花だった。

「大丈夫。知花。あのさ、保健室、行こ。」

「うん……。」

私は知花を保健室に連れていった。すると、またどこから悲鳴が聞こえてきた。

「由希。早く知花を連れてって。私は悲鳴があつた所に行く。」

そう言いながら、二枚の紙をポケットにさっとしまっているのが見えた。とりあえず、知花を連れていった。

「うーん……。知花さん、骨折かもしれない、一応、お母さんに連絡しとくから、病院に行きなさい。由希さん、少し、知花さんを見といて。」

「先生!! 麗子さん、切り傷がたくさんあります。」

椿は麗子を連れてきた。

「じゃあ、二人は教室に戻つていて。」

保健の先生に言われた通り教室に戻ると、椿が四枚の紙を見せてきた。

「見て、由希。『秋刀魚』と『か』の文字と、『椿』と

『ぎ』の文字。これって、二つは大船渡の有名な物で、かときをつけると鍵になるの。知花と麗子を傷つけた犯人を探すヒントになるかも。合言葉は『鍵は大船渡にあり』でどうかな。」

「いいよ。」

私は椿と謎を解きたかった。でも、犯人はまだ分から

なかった。椿も分からなく、懸命に考えていた。

キーンコーンカーンコーン……

「タイムリミット。授業が始まるよ。」

「うん……。時間切れ……。か。」

私と椿は急いで教室に戻った。五時間目は、社会の授業だった。今日は特別に、私が転校してきたから、大船渡の事を教えてくれるというのだ。これは好都合だ。もしかしたら、知花と麗子の犯人が分かるかもしれない。

「えー、大船渡には椿館があり、椿まつりが開催されます。また、たくさん種類の椿があり、それぞれに名前がついています。それから、五葉山という山もあります。どれも大船渡の特徴であるものです。」

私はうなづいた。どれも、犯人を探すヒントにはならない。まだ、ヒントが足りないのか。それか、私の考えが浅いのか、どっちかだ。たぶん、ヒントが足りないのだろう。

「また、大船渡はさんまが有名ですね。由希さんは食べたことがありますか。すごくおいしいんですよ。」

「前に食べました。」

「そうですか。大船渡は海と山に囲まれているところですね。自然が豊かですばらしいですね。それでは、授業は終わりです。」

「椿。なんかヒントになりそうなもの、あった。」

「ううん。全く無かった。さすがに、今日の内容じゃ犯人を出すのに無理がある。」

やっぱり、椿も無理だった。私の友達は椿だけ。椿は私のそばにいたから、犯行はできない。だとしたら、椿の友達の知花と麗子かな。と一瞬間の中によぎった。でも、2人は被害者。違った。またふり出しからだ。でも、椿の他の友達なら、あり得るかもしれない。

「椿。他に友達いないの。紹介してくれる。」

「良いよ。雄太、陽斗。ちよつと来て。」

「僕、中岡雄太。よろしく。椿とは幼なじみなんだ。」

「僕は坂本陽斗です。椿とは小学校の時から仲が良いんですよ……。よろしくお願いします。」

私は陽斗を真つ先に疑った。無口な感じがあり、あまり人とうち解くことが好きそうではなさそうだ。疑いたくはなかったが、とりあえず犯人としておいた。

「由希。とりあえず犯人は陽斗にする。どこかあやしいんですよ。」

でも、どこが違う。鍵は大船渡にあるはずだ。なのに、どこにもヒントはない。少しおかしい。

「椿。『鍵は大船渡にあり』ってさあ、もしかして、ヒントじゃないかもしれない。本当の鍵だとしたら、大船渡市内にあるはず。探してみよう。」

「うん。」

日曜日、私は椿館に家族と椿、椿の家族で行った。すると、綺麗な椿がたくさんあった。私は館内を見ていると、小さな鍵と箱が置かれていることに気づいた。

「椿、ちよつと来て。見て、これ。」

箱の前には「開けてみて」というメッセージがあった。開いてみると、「ようこそ大船渡へ」の文字があった。

「由希……。これ、どういう意味。」

「もう分かっているでしょ。」

「知花と……。麗子。」

私は最初驚いたが、すぐに気づいた。

「もしかして、あなたたちが……。犯人。ということ
は、自作自演ってこと。」

「その通りよ。よく分かったわね。」

「どうして、こんなことしたの。知花。麗子。」

椿はとまどいを隠しきれずにいた。私も、とまどっていた。

「あのね、麗子たちでね、由希をお祝いしようとしたの。

それで、少し手のこんだことをして、びっくりさせようとしたんだけど、けがしちゃった。てへっ。」

「まったく……。知花と麗子ったら……。人騒せなことをして……。本当バカ……。」

椿はあきれていたが、笑って聞いた。

「あのっ、知花、麗子、椿。あなたたちと友達でいてもいいですか。」

3人は顔を見合わせた。でも、すぐに向き直り、私を見つめた。答えは……。

「もつちろん。これから、よろしくね。由希。」

私は涙があふれてきた。友達ができて、良かった。

「大丈夫。由希。」

「うん、嬉し涙だよ。」

話していると、陽斗と雄太も来た。

「あのさ、由希を家に招いて、ようこそ大船渡への歓迎会をしようよ。僕たちもいい。由希。」

「うん、もちろん。これからよろしく。」

私は大船渡が大好きになった。これからの仲間。きっと、うまくやっていける。空が青く澄みわたっていて、太陽が海に反射して、雲はゆっくりと動いている。いい始まりだった。

「由希。行・く・よ。」

「うんっ！」

私は大きな声で返事をした。景色は美しく輝いていた。これからの応援するみたいに……。私は大きくのびをした。がんばろう！と気合いを入れた。そして、大きく息をすっていき、友達の方に走っていった……。

大船渡がめぐんだ奇跡

綾里中学校一年 熊澤 舞

山を越え、海を越え、トンネルを抜けた、ずっと先にある町。そんな町、大船渡に、私は今日、引っ越してきた。

「もう、ちゃんとしてちょうだいよ。」

「はい。」

車を運転しながら母が言った。私は、うんざりしながら答えた。私の頭の中は、新しく行く中学校のことでいっぱいだった。

「せっかく、引っ越してきたんだから、外の景色ぐらい見たらどう？海がきれいよ。」

私は、返事をしなかった。なぜなら海など興味無いからだ。そんな、何気ない会話をしてるうちに、新しく住む家についた。建ってからまだ少ししか経ってないらしい。平屋建てだがけっこう中は、広い。私は、自分の部屋に荷物を置いた後、新しく行く学校の、建物を見に行くついでに、通学路も確かめた。思っていたよりも大きい。でも少し古い。近づいていけばいくほど古い。当然。今日は、土曜日なので誰もいない。

カギがかかっているため、窓から中をのぞいた。まあ人数の多い学校らしい。一階しかのぞけなかったため、何クラスあるのか、いくつ部活、委員会があるのかは、わからなかった。

すると、その時、

「あのーうちの学校に何か用でも。」

「あつ。いいえ。こんど転校して来るので、どんな学校なのかなと見に來ただけです。」

「そうだったんですね。ちなみに俺は、一年の南川翔。よろしく。」

「えっと、私は、貝山椿。南川君よろしくね。」

「そんな南川君だなんて。翔でいいよ。俺も椿ってよぶから。」

「うん。」

「いつから学校に通うの？」

「月曜日から。」

「そうなんだ。入る部活とか決めてる？」

「うん。あるんだったらバレー部かな。スポ少でやってたし。あと委員会は、図書系かな。」

「そっか。バレー部も図書委員会もあるよ。」

「そろそろ家に帰らないと。片づけが残ってるから。」

「そっか。じゃまた月曜日。」

「うん。」

そういつて帰る途中、さつき会った、彼のことで頭がいっぱいになった。学校のこと、彼のことで頭がパンクしそうになった。ふと景色を見ると広く青い海が見えた。何かその海は、不思議だった。見ているだけで、さつきまで頭がパンクするぐらい考えていたことをくだらなく思い、忘れてしまっていた。

家に帰ると、母は、夕食を作っていた。

「ただいま。」

「おかえり。遅かったね。」

「うん。学校いったら、南川翔という人に会った。同級生だって。あと海見て来た。」

「昼間は、興味無さそうにしてたのに。」

「別にいいじゃん。」

「まっいいか。ごはんもう少しで、できるから手洗ってきなさい。」

「はーい。」

私は、ごはんを食べて、すぐに部屋に行ってベッドに横たわりまた考え事を始めた。

「はあ。何やってんだうち。」

いつの間にか、朝になっていた。今日は、母と近くのスーパーに、食料を買いに行った。

「うち、雑誌コーナーにいるから、おわったら来て。」

そういつて、コーナーに行き、雑誌に目をおおしていると、

「椿。」

その聞いたおぼえのある声にびっくりした。

「翔君。」

「偶然だな。今日は買い物に。椿は？」

「うちも同じ。母と来てて。」

「そっか。じゃ俺はこれで。またな。」

「うん。またあした…。」

そうやってぎこちなく、翔と会話し、私は、母と家に帰った。家に帰ってからは、いつもどおりで、その日をおえた。

そしてとうとう学校に行く日が来た。がやがやとした教室に、担任の先生と入った。

「みんな静かに。今日からみんなと一緒に授業を受ける転校生です。では、自己紹介を。」

ドキドキする胸をおちつかせてから私は言った。

「こんど引越して来た貝山椿です。よろしくおねがいします。」

言いおわると先生が、

「ということみなさん仲良くするように。席は…」

南川のとなりが空いているからそこに。」

私は、「はい。」といって席に向かった。すると翔が、
「分かんないことあったら聞けよ。」

「うん。ありがとう。」

そうやって朝の学活がおわるとみんながこちらの席に
やって来た。

「ねえねえ貝山さんは前どこに住んでたの？」

「得意なスポーツとかある？」

「バラエティとか見る？」

など多数の質問に答えた後、ある一つの質問が私を困
らせた。

「貝山さん、スマホ持ってるよね？もしよかったら、
ライン交換しよ。」

「えっと、ゴメン。私、親がきびしくて持っていないの。
本当にごめんね。」

そう言ったとたん、みんなの質問ぜめがとだえ、変
な空気がながれ、みんな席からはなれていった。こう
なることは、予測していた。まえの中学校に少しいた
ときも、このことをきっかけにだれとも話さなくなった。
きつと今回もそうなのだろう。翔だってもう私なんか
と話さないだろう、そう思ったとたん、

「なあなあ、なんでスマホ持っていないだけでみんなは

なれるんだろうな。別に俺はそういうのきにしない
けど。ま、なんかいやなことあったら言えよ。相談
のるから。」

「うん。本当に翔は優しいんだね。ありがとう。」

と言って笑顔でかえすと、

「やつと笑ってくれた。こっちにきてからぜんぜん笑っ
てなかったからな。椿が笑うと、椿の花が咲くみた
いにかわいい。椿は、笑ってる顔のほうが似合うよ。」
初めて言われた言葉だった。かわいいとか、笑ってい
る顔がステキとか。私も翔の笑っている姿が格好いい
と思った。私は、今初めて翔のことが好きで、片思い
ということに気づいた。

それから、うそみたいに、うまくいくことがあった。
8月の夏祭りには、一緒に行こうと、誘ってくれたし、
家族どうしが、仲良くなり、一緒にお出かけしたり、
キャンプに行ったり、文化祭では、共演が多い役になっ
たし、12月のクリスマスも大晦日も一緒にすごし、
初詣も一緒にお参りをした。なんだか時がすぎていく
のを早く感じてあつという間に3月になっていた。
そんなある日、翔が、

「海見に行こう。」

というので行つた。言われた場所に行ってみるとまだ、

翔の姿はない。なんとなく海を見て初めて大船渡に来たことを思いだしていた。そんな思いで、きれいでいつみても、おだやかな海をみていると後ろから、

「椿。」

聞きなれたその声。まちがいなく翔だ。

「どうしたの急に。海に行こうなんて。めずらしいじゃない？」

「実は、伝えたいことがあつてさ。あのそのさ、何ていうか、お前と会った時から俺は、お前のことが……。」これってまさかと思っていると翔が、

「好きだったんだ。」

私の心の中に衝撃が走った。まさかの翔の告白に私は頭の中が真っ白になった。なんて返事をかえしたら良いのだろう。そんないきなり言われても、私はどうしたらよいのだろう。

「椿、俺はお前の椿の花のようにきらきらとして、じゅんすいで、なやんでも自分で答えを見つけるのは良いところだけど、なやみすぎはよくない。こんどからは、俺がそばにいて、お前を笑わせるよ。」

そんな、今までずっと私の事をおもってくれてたんだ。すぐくうれしい。

「あと、これプレゼント。椿の花。俺、小さいときから

この花が好きでさ。なんていうか将来、椿の花のような人に出会いたいなあと思っていたら、まさかこんなに、ステキな人に会えるなんて、おもってもいなかったから。」

きつと、この大船渡だからこそ出会えたんだ大船渡の市の花は、椿で、大船渡の神様が私と翔を出会わせてくれたんだと思った。私は、一度、海を見て、心をおちつかせて言った。

「翔、私も好きだよ。翔の真つすぐで、自分の考えをつらぬきとおすところが好き。」

こうして、幸せな時は、ずっとつづいていくのだろう。二人をめぐり会わせてくれたこの、大船渡で。たぶん私がうまくいったのも、椿の花、この広い海、豊かな自然のおかげだろう。大船渡だったから大船渡でしかできない恋だったんだ。きつと、これから、十年後も、百年後も、いつまでも、この大船渡は、変わらずにのこっていくだろう。

人や動物、自然など豊かなものにめぐまれいつまでも、いつまでも、私たちの心の中から消えることは、一生ない。もし、町がなくなっても、私たちの心の中で、忘れられないあの風景、思い出は、いつまでも、ありつづけるのだろう。

プレゼント

第一中学校三年 千田 麻夏

「おはよう」

あの子はいつも通りみんなに笑顔であいさつをする。

「×××ちゃんおはよ!!」

「ちよつとやばい、×××宿題見せて」

クラスの中心人物の×××。生徒会執行部にも入っているし頭も良くて運動神経抜群。私とは天地の差だ。

ちなみに私、優友^{ゆうゆ}はいつも隅で本を読んでいるタイプ。

頭は中の上（だと思いたい）。

運動は、というと……。いわゆる陰キャってやつだ。

「優友ちゃん。英語の教科リーダーだったよね？ ワークって今日提出？」

「そうだよ。」

私はおどおどしながら答える。×××は私にすら気軽に話しかけてくれる。きつとクラスで浮いている方の私に気を遣ってくれてるんだと思う。英語の教科リーダーは他にもいるのだから。体育の時もそうだ。二人一組を「自由に」作れていう地獄の指示も、あまり目立たない子達と組んでいる。理由はもちろん、私達

陰キャが一人ぼっちにならないようにするためだ。

その日の午後。

五時間目が終了し、掃除をしていた時だった。地響きがする。地面が揺れた。

「うわあ!」

私は地面にしゃがみこむ。

「地震だ。早くそとに出て!」

状況を理解する暇もなく、頭に先生たちの叫び声が響く。

「優友ちゃん早く」

ぼうぜんとつつ立つてる私を×××は引っぱっていつてくれる。

物がおちる音。

警報のサイレン。

頭が痛くなるような音。

吐いたのか嘔吐物が周りに散乱している。

私の目にはそのシーンだけ、その光景だけ目に焼きついていた。

あれから2年の日が過ぎ去った。クラスみんなはそれぞれの場所へ転校しバラバラになってしまった。だけど、私と×××は同じ学校に転校した。その学校

は比較的被害の少ない所だったので震災時のことをたくさん聞かれた。

転校して一月ほど経つと私は瞬く間にクラスの中心グループの仲間入りをした。理由はよくしらない。グループのリーダー的存在の沙希によると、

「可愛いかったんだもん。一目惚れみたいなかんじ!!」ただただ苦笑いだ。だけど沙希たちのおかげで前の学校とは180度ちがう生活になった。外見はもちろん内面的な部分も変わった。役員があつたら積極的に立候補したし(沙希と一緒にやろうと言われてやってるだけ)、ついにはいつちよ前に気になる男の子までできた。転校してからの日々は楽しくて仕方なかった。

一方、×××はいじめられた。しかも×××だけが。きつと少し可愛いか、少し勉強ができるとかそういう理由かなって。

結局、これといった理由は無かった。理由もないのにいじめられていた。理不尽だった。殴られたり、蹴られたり。

一ヶ月もたった頃には以前のような×××の面影もなかった。人に怯えて目立つことを嫌がった。以前の私を見ているようだった。

私はというと、×××があんな姿になるまで学校で

の生活が楽しくて楽しくて、気づきもしなかった。気づいたのはあんなった後だった。そして、気づいてもなお私は見てみぬふりをした。助けてまた以前の自分に戻りたくなかった。クラスの中心にいたかった。いじめのターゲットになりたくなかった。

そして、突然×××は学校へ来なくなった。理由はみんな分かっていた。

「あいつがいなくなつてせいせいするぜ」

男の子たちはそう言つて笑い合う。

「次のターゲット誰にする？」

そんな声が聞こえた。やっぱり一緒に来たあいつだろ、と言っている声も聞こえた。気が遠くなるようだった。

次の日から私に対してのいじめが始まった。仲良しだつて思つてた沙希達にも悪口や悪いうわさを流されたりした。

「私たちはずっと友達だよ。もしどつちかが苦しんだり、辛そうにしていたらお互いに助けあうこと。」

こんな言葉も交わしたはずだったのに。「自業自得」。

この言葉が頭に浮かぶ。私は裏切った。たくさん助けてもらつたはずなのに何の助けもあの子には差し伸べなかったから。

辛い日々耐えているうちに私達は進級した。二年

生になっても私はいじめられていたがただ一つだけ大きな変化があった。×××が学校に来たのだ。クラスの全員がおどろいた。前の明るい×××そのままだった。そして×××がいる所でいじめられると必ず私をかばってくれた。

「どうして？」

教室に二人きり。かすれて少しずつしか出ない声を振り絞って聞いた。

「おじいちゃんが言ったから。」

「優陽、優陽の字は優^{ゆう}しいに太陽の陽と書いて、優陽だろう。人に優しくすることができて太陽の光がつつむように辛い思いや、苦しい思いをしている人をつつめるような人になってほしい。おじいちゃんからの最初のプレゼントだ。」

私はこの名前に誇りをもっている、そうはつきりと言う優陽の姿はかっこよかった。

その日の夜、ずっと話しもしていなかった母に自分の優友という名前に込められた願いを教えてもらった。

「友」達に「優」しくし優しくされて人にかこまれた幸せな人生を歩んでほしい。

何故かは今でも分からない。

それを聞いたとたん口からこぼれるように学校であったことを話していた。泣きながら何度もつつかえながら。何かが変わってほしくて。

「おはよう」

優陽と私はこの一件以来ずっと仲良しになった。私たちをいじめてたグループのみんなはそれぞれ色々な所に転校していった。沙希達とはもう話していない。確かにクラスの中心にいた時はすごく楽しかった。けれど話すのにも気を遣ったしすごく疲れていたのも事実だった。だからなんでも話せる優陽といるのは二倍も三倍も楽しい。

きつと私たちはこれから何があっても助け合っていく。沙希達と交わした、薄っぺらい約束じゃない。

私たちが生まれ育った故郷も少しずつ復興へ向かって進んでいる。

「私たちの成長を見守ってくれる故郷に恩返しする。」

「一歩ずつでも必ず前に進もう。」

晴ればれとした空の下、私達はそう誓いあう。

《一般部門》

坂田 百次郎
さかた ももじろう

菊地 崇浩

その昔、陸前は気仙のある所に、年の頃、七十、いや八十にもなろう男がおりました。

男の名は、七治郎。
ななじろう

この七治郎、何十年前か前、亡くなった父の跡を継ぎ、当主となったのにもかかわらず、すぐに当主を、我が子に譲っております。

そもそも、七治郎は変わった男でした。

おサムライに憧れ、そういった本や話を、いつでも見たり聞いたりしております。

吾妻鏡に、太平記、金太郎から、桃太郎。
あずまかがみ たいへいき

突然、坂田百次郎を名乗り、さかたももじろう 齢七十にして、サムライとなる決心をしたのでした。

「坂田」の苗字は金太郎の本名、さかたのきんとしき 坂田公時から、「百次郎」の名は、桃太郎から取り、桃の字には、数字の百を当てました。

さて、七治郎には、愛犬がおりました。

名前は「クロ」

相棒は白い毛の方が多くなり、どちらかといえば「シロ」でしたが、最初のお供として「熊之助」くまのすけの名が与えられました。

ここに、百次郎の冒険の旅が始まりました。

百次郎は、熊之助と共に南に旅立ちました。

サムライ坂田百次郎を名乗る七治郎、でも、実際には「平民の七治郎」のままで、誰かに認められなければ、と思っていました。

南に、昔はおサムライで、お城の主あるじだった家があり、その身分の高いおサムライに名前を認めてもらおうと考えました。

まもなく、お城に着き、ふもとのお屋敷の玄関で、百次郎、大きな声で言いました。

「お頼み申す。それがし、苗字と刀、持つ事許されたく、参りました」

たどり着いたお城というのは、五百年以上前からある「城あと」でした。

お屋敷は、その子孫のものでしたが、今は、農業を営み、田おこしの最中でした。

ほどなくして、主は、玄関にいろどこかの爺さまと、白っぽい黒い犬に気づきました。

大きな声で、何か言っているのが聞こえて、こわごわ近づきました。

近くまで来たところで、目が合いました。まっすぐな目の、爺さまが言いました。

「それがし、苗字帯刀、許されたいのです」

「みよ？ なにすっ？」

「苗字と刀、許されたく参りました」

事態が飲み込めず、主はたずねました。

「何が、困った事でもあんのすか？」

百次郎は、あらためて言いました。

「これは、とんだご無礼を。」

私は七治郎と申します平民でございます。

思うところあって、サムライと認めて頂き、名字帯刀、許されたく参りました」

主、しばらくポカーン。

それから、静かにうなずき表情も穏やかに、丁寧な口調で言いました。

「ともかく、茶でも飲んでゆかれよ」

主、七治郎の名、聞いた様にも思いました。

「何処だいで、家を継いだども、我あ子さ譲った男の話を、聞いてような・・・」

とは言え、おそらく、八十ほどの爺さま、当たり前は無いと、家に招きました。

苗字許され、サムライ坂田百次郎、熊之助と共に、勇ましく凱旋したのでした。

晴れてサムライとなった百次郎、来るべき戦いに備え、武具を揃える事にしました。

幸いにも、使われない鎧一式がありました。なぜ、鎧一式が、こうも簡単にあったのか、それは、この鎧が「剣舞」で使われていた物だったからでした。

使い古され、新しい物と入れ替えられて、片付けられていたのです。

さて、サムライの特権というのは、苗字を持つこと、そして、刀を持つことでした。

苗字を持つことはできました。

刀について、お城の主は言っていました。

「坂田殿、こたびサムライとなった訳ですが、刀を持つと言うのは・・・、どうでしょうな。」

そうだ、こんな話があります。

あるサムライは、刀を持つ事が許されず、代わりに、鉄の扇子せんすを持っていたとか・・・。

ま、刀持たずも、魂たましいこそサムライですな」

主は、せめて武器を持つことだけは諦めてくれることを願い言ったのでした。百次郎の家には、武器が伝わっておりました。

それは、槍やりでした。

でも、その槍には刃の部分が無く、つまり、柄つかの部分だけを残した、木の棒でした。

百次郎、つぶやきました。

「刃は無くとも、魂こそサムライ」

そして、この槍を身につける事としました。

少しばかり長い棒でも、爺さまが持てば、きっと、

杖に見えることでしょう。

その爺さまが、鎧を着たらどうでしょう。

一番いいのは、誰にも気づかれない事です。

まあ・・・もし、気づかれても遠くからなら、体格のいい人が、杖を持っているように見えるだけで済むかもしれません。

でも、近くで気づかれたとしたら・・・、あとは「剣舞」と思ってもらい、おかしい事にならないのを願うばかりです。

何にせよ、身支度みじたくは整いました。

坂田百次郎の名をたまわって、甲冑かっちゅうを身にまとい、伝家でんかの槍を手にして、ここに、一人のサムライが、名実ともに誕生しました。

百次郎と熊之助は、西に旅立ちました。

代掻きしろかをしていた男は、手を止めました。

向こうから、この辺りでは珍しく体格のいい男が、杖を手に歩いてきましたが、その杖が随分と長いのが遠くからでもわかりました。

近づくにつれ、その男は体格がいいわけではなく、鎧

を着ていたため大きく見えていたのがわかりました。

「ぼっ、剣舞だべが・・・？」

さらに近づく、男は爺さまで、その顔には見覚えがありました。

すると、その見覚えのある爺さまの後ろから、白っぽい黒い犬が出てきました。

「あつ、七治郎・殿だか？」

「それがし百次郎」

「ももっ？ 七治郎殿だがすぺ？」

「も・も・じ・ろ・う」

百次郎は、少しばかり苛立った様でしたが軽く会釈し、そのまま歩き去りました。

百次郎の背中に、別の男が声を掛けました。

「剣舞すかー、七治郎どのー」

やがて、百次郎と熊之助は、森に続く山道へと入って行きました。

森の中は、昼間というのに、夜の様。

このあたりは、死んだ家畜を埋め供養する、家畜の墓場のような場所でした。

そんな事もあつてか、人通りは無く・・・。
ギャーッ、ギャーッ、ギャーッ、・・・。

上で、カラスがバサバサ飛んでおりました。

と、熊之助が、ウーッと唸ったかと思うと、ワンワンと吠えながら、道をそれ、森へ走りだしました。

「ただのカラスだ。恐れることはない」

そう言つて、熊之助のあとを追いました。

すると、吠える熊之助の先に「黒い影」が見えました。影は、熊之助を追い払おうとしておりましたが、百次郎と目が合うと、途端に逃げ出しました。でも、逃げられるような道もなく、熊之助に吠えられてもいたので、近くの木を登り始めました。

影は、まるで猿のように、スルスルと木を登っていききました。

「逃げるかつ、化け物めっ」

百次郎は声をあげ、木へと駆け寄りました。

あせつた影は、木の途中で枝に引掛かり動けなくなつてしまいました。

百次郎、ここぞと槍で突いたり叩いたり。

「猿の化け物か、カラスの化け物か！

いざ、成敗してくれようぞ！」

槍を思い切り振りかぶった時、

「待つてける、はだがないでける」

黒い影が喋りました。

木から降りてきたのは男。
聞けば、その名は「捨吉」

貧しきで、木を売ろうかと思つたとの事。

「おぬし、それがしの家来にならぬか？」

そう、百次郎は言いました。

猿の様に木登りが得意な捨吉に、百次郎は、猿之進の名を与えようかとも思いましたが、しばらく考えて言いました。

「誰にも、得手不得手があり、おぬし木登りの得手あれば、得手之助の名を与えよう」

実際「サル」でも「エテ」でもサルはサル。

百次郎、名付けたものの、少し気の毒顔。

捨吉の方は、新たな名前に、満足顔。

そんな二人を、静かに見ている熊之助。

百次郎、熊之助、得手之助は、北に旅立ちました。

その頃、七治郎の家の者たちは、西の百姓から、七治郎が百次郎を名乗り「旅」をしている話は聞いておりました。

その旅は、人畜無害なものと思っておりますが、

得手之助なる得体の知れない者まで加わっていると知り、相談を始めました。

皆での相談の結果、家の者を、こつそりと旅に付いて行かせ、見守る事としました。

さて、北へと川沿いを行く百次郎たちは、一面の草原に出ました。

草原とは言っても、そこにあつたのは萱で、百次郎たちの背丈より高いため、先は見えず、足元の悪い中、かき分けて進んで行きました。

にわかに空が、雨雲で暗くなりました。

百次郎がつぶやきました。

「いやな予感がする、オロチが出るやも」

得手之助がたずねました。

「オロヅ？オロヅってなにす？」

百次郎は言いました。

「オロチとは、蛇だ。人をも呑みこむほど大きく、頭がいくつもあると聞く」

得手之助は、えらいところへ来てしまったと後悔しておりました。

金銀財宝を貰えると、お供にはなりました、でも、金銀財宝も、命あつての物種です。

得手之助は、つぶやきました。

「どうが、どうが、何も出ませんように。」

もす出だら、夢でありますように」

と、かき分けた先で草原は終わっていて、百次郎たちはその先に飛び出しました。

そこには、頭が八つもある、大きな大きな蛇が……、いるはずありませんでした。

ほっと安心の得手之助の心をあらわすかのように、雲は消え、空は青空。

さらに進み、峠へと差し掛かった時でした、峠道を舐める様に、霧の塊が近づきました。

霧は、あつという間に、一行を包み込み、一寸先も見え無いようになりました。

百次郎がつぶやきました。

「いやな予感がある、土蜘蛛が出るやも」

怖さで、土蜘蛛が何か聞けない得手之助。

百次郎は続けて言いました。

「一千年ほど前、退治されたはず……」

得手之助は、「一千年ほど前」の言葉に、もう何が何やら……と、一陣の風が吹き、霧を一気に吹きとばしました。

そこには、頭は虎、八本の脚をもつ巨大な化け物が……、いるはずありませんでした。

得手之助は百次郎に向かって、

「も、百次郎どのに、恐れをなすて、

オロゾもツヅグモも逃げだんだべもの」

と必死な笑顔で言いました。

すかさず、

「この辺りは、すでに平穩無事、戻るぞ」

と百次郎、その横顔は、がっかり顔。

得手之助はと言え、すっかり安心顔。

そんな二人を、静かに見ている熊之助。

百次郎たちは、東へと旅立ちます。

「酉之助」という若者も加わりました。

酉之助の名は、酉年生まれの為つけられた、本当のものでした。

百次郎は、次出会う者には、「雉之丞」の名を、与

えようと考えておりましたが、自らお供に志願した酉之助を、これも何かの縁と、本当の名前のまま仲間に加えました。

……でも、酉之助には秘密があったのです。

実は、酉之助は七治郎の家の者たちが相談し、見守らせるべく使わした者でした。

酉之助の家は、何代か前からの遠縁^{とおえん}でした。

おそらく、顔も名前も知らないだろうと、若者を使わす事になったのでした。

南に、名をたまわって伝家の槍を手にし、西に、影と戦い家来として、北にあつては、姿無き化け物と戦った百次郎。

猿鳥犬の味方を得て、東に旅立ちました。

旅^{あと}の後、七治郎は九十近くまで生きました。

七治郎の家は、実は父が亡くなった頃から、家運^{かうん}が傾^{かたむ}いておりました。

七治郎が当主になって、すぐ、子に当主を譲った頃、家はさらに傾き、一時、いわゆる「釜^{かま}を返^{かえ}す」つまり、破産^{はさん}するかもしれない状況が続きました。

ですが、子や孫、親類は様々に家を助け、ある者は道を開き、また、ある者は人を育て、以前とも、また違う、平穩無事を得ました。

その後、生きていた頃の七治郎について、多くを語る子孫はおりませんでした。

でも、不思議と、七治郎を悪く言う者は、一人としておりませんでした。

それは、子孫たち自身、七治郎に似た所があり、七治郎もきつと、子孫たちに似ていただろうから、という事かもしれません。

♪（浦島太郎で）

むかしむかし、七治郎は、当主のお役目は子に譲り、毎日本ばかり読んでいたら、危^{かまけ}うく釜返すところでした。

お家の大事に、子や孫は、それぞれの力を尽くし、お家も地域もまた栄え、それが我らの物語、そして未来の物語。♪

初恋はカモメが見ている？

村上 真紀子

「ラブレターもらっちゃった！」

町で普通の少女が走って教室に入ってきた。

名前は山本里緒と言う。

「ラブレター？まちがいじゃねえの？」

幼なじみの菅原健太が半笑いで言った。

「ちゃんと名前が私あてです。」

確かに「里緒さんへ」と書いてある。

「マジかよ、物好きもいるんだなあ。」

と、健太が言うとき里緒がけって走り去って行った。

「あんたバカなの？」

里緒の友人の神崎夏美があきれたように言った。

「うるせーな。」

健太が不機嫌そうな顔で言った。夏美は、健太のある

秘密を知っている。

「返事どうするんだろうね。」

「・・・。」

「何なのよ、もう!!」

里緒は健太の言動にイライラしていた。

「私だってモテるんだからね。」

里緒は屋上に来ていた。ラブレターに指定してあったからだ。待っていると男の子が来た。茶髪でちよっとチャラそうな子だった。

「本当に来たんだ。」

と、男の子は嬉しそうに言った。

「返事を・・・え？」

気付いたら周りには男の子の友達がたくさん居た。

「な、何？」

「バツカじゃねえの、本気にした？あんたになんか告白するわけないじゃん、鏡・・・。」

(バコッ) ↑里緒が顔をグーで殴った音

「最っ低っ!!」

屋上から下に降りると、階段の所に健太と夏美が居た。

「・・・な、夏美イー!!」

里緒は夏美に抱きつきながら泣いた。

「おー、よしよし。」

夏美は里緒の頭を優しく撫でた。

「だから言っただろ。」

「だってえー。」

「きったねえ(笑)」

健太は笑いながら頭をグシャグシャになでまわした。

翌日、里緒は呼び出されていた。

「今度は何よ？」

里緒は昨日の事もあったので夏美と一緒に来ていた。そして、真面目そうな男の子が来た。

「来てくれたんですね。」

「は、はい。」

「あの・・・俺・・・神崎さんが好きです。」

「え、私？」

「か、か、神崎さん？」

「私、行くわ。」

「え、里緒？」

「やってらんない。」

「あれ夏美は？」

「告白されてる。」

「は、マジで？」

「何で私・・・？」

「だよな。」

「健太、明日、ヒマ？」

「・・・ふえ？」

「ふえって・・・（笑）」

「いや、な、何だよ？」

「でかけない？」

「ふ、2人で？」

「何、嫌なの？」

「どうしてもって言うんなら・・・」

「いや、別に」

「行く。」

しばらくすると夏美が来た。

「夏美？」

「どうしよ・・・明日でかけることになっちゃったよー。」

「・・・じゃあ私らと出かける？」

「私ら？」

思わぬ事でWデートすることになった。

「お待たせ・・・。」

「・・・何だよ？」

健太はシャツにベスト、黒いスラックス、里緒は花柄のワンピースに黄色のカーディガンをおっていた。

「・・・おしやれだね。」

「お前こそ・・・マシだな。」

「マシって何よ？」

「遅れてごめん。」

夏美は赤のノースリーブにギンガムチェックスカート、男の子山田初は黒のパーカーにジーンズだった。

「行きますか。」

「カラオケ・・・しかないよな。」

「うん。」

この町にはカラオケ店が1つしかない。というか遊ぶ場所があまりない。

「何歌うー？」

「あ、あのV系・・・。」

初の一言に皆ビックリした。

「え、好きなの？」

「は、はい。」

しかも上手かった。

「かっこいいー。」

夏美は目がハートになっていた。

「俺はロックで行く。」

「よっ！」

健太が盛り上げると、夏美がラブソングを歌い、里緒はアイドルソングを歌った。

2時間、意外と盛り上がり、また1軒しかない服屋へ行った。

「何かさ・・・安くていいけどさ・・・」

「もう少しくらい・・・」

「悪かったわね。」

「お、お母さん。」

服屋の店長で里緒の母が立っていた。

「あれ、君は？」

「私の彼氏の山田初君です。」

「え、あ、初めまして。」

「いつから？」

「さっき。」

「よろしくお願いします。」

「里緒も頑張るのよ。」

「え、何を？」

「健太君里緒が好きじゃない。」

「おばさん!!」

「は？」

里緒以外気付いていた事をさらっと里緒の母は言った。店を出ると皆無言だった。

「じゃ、初君帰ろっか。」

「は、はい。」

「・・・。」

初と夏美は足早に帰って行った。

「あのさ・・・。」

「おばさんのかんちがいだ。だから気にするな」

「そんなわけないじゃん。」

「・・・ごめん。いつかとかはわかんないけど気付い

たら好きだった。里緒が何とも思っていないのは知ってるから。」

「健太、ありがとう。でも私……。」

「言うな。わかってるから。」

「ごめんね。」

涙が出そうになるのを必死で止めた。

そして、1ヶ月後――。

「転校？」

「お父、先生早退します。」

「え、山本？」

里緒は夢中で走った。

「健太のバカ!!」

「バカって何だ？」

「え、転校じゃ……。」

「親父が出かせぎだよ……。」

「じゃあいるの？」

「うん。てか学校は？」

里緒は健太に抱きついた。

「おい」

「大好き。」

「……俺も……。」

幸せそうな2人をカモメが見ていた。

大船渡の海

阿部 優子

私は小学校の入学式を、千厩小学校で行った。父親の仕事は、国家公務員だった。なんと、その入学式の翌日、転勤を命ぜられたのだ。たった一日、そして入学式の写真は、千厩小学校で残っている。

大船渡。どんなところなのだろう。子供ながらに、ふつと思った。

引っ込み思案だった私を、父親は新しい小学校でうまくやっていけるのか、心配していた。みんなは、男の子と女の子の二人がけ。私は突然の転校生なので、一番後ろの一人がけ。前に座っていた男の子と女の子に、自分の名前を書いていたら。「へゅ」の字がおかしい。」といじめられた。父親は、すぐに学校に行き、席がえをお願いしたことを、なんとなく覚えていた。友だちがでにくい性格である私のため、父親は転勤族であるのに、なんとか転勤をしないように職場に申し出ていたようだ。

大船渡に引っ越しして、どれくらいしてからだったのか、母親と祖母とで、高田松原に行った。はじめての海。その時は、まだ砂浜で遊んだだけだった。そして千厩では、きらいだった「わかめ」が、なぜか、ここに來てから大好きになった。

小学四年の時、同じクラスになった女の子が、私を変えてくれた。少しずつ、明るくさせてくれたのである。家も近所であることがわかり、それから家族ぐるみのおつきあい。一緒にいろんなところに行った。海水浴の船河原や、吉浜。碁石海岸のホタテ焼き。

私は、大船渡の海が大好きになっていく。入江に浮きが、きれいに並んでいる風景。最高だ。

小学校も中学校も校舎の窓から、海がみえる。勉強は好きじゃなかったけど、それだけで学校に休まず、通えたと思う。

高校受験の時、プレッシャーに弱い私を、父親は、またしても心配し、盛岡の私立校を最初に受験させた。そして県立。

私は私立校の雰囲気が入り、そちらに気持ち向きかけていたのだが、父親は「お前みたいな性格は、

共学でなきゃ社会に出てから困る。」という判断で、県立へ入学。

今度は山の方ではあったが、通学路に盛川があり、それが気にいった。冬に鮭がのぼってくるのを、間近に見ることができる。なんとすばらしい事か。

が、高校はなんとなくつまらない。中学の時は、いろいろ楽しかったのに。なぜだろう。化学の時間、ぼーとそんな事考えながら、窓の外を見ていたら先生にしかられてしまった。

高校三年、進路を決める瞬間になって、私は悩んだ。福祉関係の仕事につきたいと、仙台の学校を一年の時から決めていたはずなのに。

冬休み。父親に頼んで、碁石海岸につれていってもらった。松林の間から見える、岩に打ちつけられる白波を見たかった。冬の海のきびしい灰色。夏の青い海とはまたちがう、私はそこに答えをみつけたかった。父は、だまって遠くにいた。

結果、迷いに迷い、私は望んだ道とは別に東京という街を選ぶこととなる。東京の華やかさに、あこがれたところもあったのだろうか。

小学校、中学校、高校と私には、いつも大船渡の海

があった。

東京には、ない。潮のにおいもない。それでも35年居ることになるのだが。

東日本大震災の時、私は埼玉にいた。埼玉もすごい地震だった。すぐテレビをつける。すると、そこは私のふるさとである大船渡をはじめとする、東北全般の光景だった。

大津波。

私が知っていた大船渡の岸壁の姿。うそだろ。ここまで、ひどいなんて。

でも、私は何もせず、何もできず、ただ埼玉にいた。

三年前、今の実家がある一関に帰ってきた。

そして、今年平成三十年六月二日に、小学四年の時に出会った女の子と二十数年ぶりに再会した。いろんな話をし、そして車で大船渡をまわってくれた。変わったけど、変らないなつかしい場所、なにより変らない海がある。涙がでてきた。

今日、七月二十二日、日曜日。吉浜海岸での海開きがあると知り、ぜったい行こうと決め、大船渡線の列車に乗った。三陸鉄道。

復興まで大変だったろうと思う。それでも変らない景色に感動する。

海開きの儀式。女性の宮司さんの所作が、とても優雅で美しい。そして、短パン、Tシャツに着がえて、波打ち際に腰をおろした。

大波、小波に身をまかせて、いろいろと想う。強い波にうたれ、そして、ひきずられる。石が当たる。いたい。水は、つめたい。

津波にのまれ、亡くなった人たち、今もって海の中にいる人たち、どんな気持ちだった？うちつけられた波のしぶきが、口に入り、しょっぱい。泣いてしまうじゃないか。

それでも、こうして青い楽しい海を帰してくれたんだね。うれしいね。とつても。私の大好きな海を、本当に心から感謝します。

父親は、私の育つ環境として、この大船渡という町を選んだ。そして、それが、今の自分を作ってくれたのだと、父にも感謝する。

海洋国家、日本。太平洋の一部分である大船渡の海。

私にとって、大事な大事な、ふるさとである。

第 28 回

ふるさと・おおふなとお話大賞審査委員

委員長 石 山 宣 昭

委 員 奥 田 昌 夫

委 員 雫 石 敏 子

委 員 鈴 木 直 樹

第 28 回

ふるさと・おおふなとお話大賞作品集

発 行 日 平成 31 年 1 月 15 日

編集・発行 大船渡市立中央公民館

〒022-0003

大船渡市盛町字内ノ目 4 番地 2

TEL 0192-26-3166

FAX 0192-26-5903

